琉球大学学術リポジトリ

沖縄社会の越境的ネットワーク化とダイナミズムに関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 金城宏幸 公開日: 2010-07-14 キーワード (Ja): ウチナーンチュ大会, エスニシティ, ディアスポラ, 日系, 沖縄コミュニティ, 沖縄系コミュニティ, 県人会, 移民, 言語文化, 越境的ネットワーク キーワード (En): 作成者: 金城, 宏幸, 上里, 賢一, 前門, 晃, 野入, 直美, 鍬塚, 賢太郎, 比屋根, 照夫, 中村, 完, Kinjo, Hiroyuki, Uezato, Kenichi, Maekado, Akira, Noiri, Naomi, Kuwatsuka, Kentaro, Hiyane, Teruo, Nakamura, Tamotsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17487

第１部

伊波普猷と日系ハワイ移民
―ウチナーンチュ・ネットワークの源流―

比屋根照夫

（一）

若し凡ての現状打破が危険であるならば、私は確かに危険思想家である。
若し凡ての権威反抗が不穏であるならば、私は確かに不穏な人物である。
而し現状維持に進歩はなく、権威盲従に自由はない。
進歩せない社会、其処には堕落と沈滞がある。
自由のない人生、其処には廃退と死滅がある。
（中略）
破壊？建設？破壊即ち建設。私は破壊の為に破壊はせぬ、私の破壊は同時により進化せるものの建設である。

ここに掲出した一文は、伊波が大戦末期の昭和十九年京都の河上肇に送った『布哇労働運動史』の冒頭の文章である。オワフ第二次同盟罷工のリーダー堤隆の烈々たる気迫のこもった一文であるが、言論・思想禁圧下の昭和戦時期に伊波はなぜ時局に「危険」と見なされるような書籍を河上に送ったのか。それはこの著作がこの時局に痛切な意味を持つものであったからであり、１９２０年代初頭のハワイ労働運動の苦闘を河上と共有することで、この「暗い谷間」のを生き抜こうとする伊波の決意の現われとも言える。この意味で伊波にとってハワイ体験はまさにこの時局の中で譲ることの出来ない魂の一線であり、時局への抵抗の拠点でもあつた。

このような観点に立って伊波普猷のハワイ移民関係諸論文を検討してみると、それらが昭和戦前期の伊波の政治・社会思想を解明する上で重要な論文であるとの事実に改めて気ずかされる。明治・大正期の伊波は研究のかたわら啓蒙運動・民族衛生運動に精進し，積極的に社会的な発言を繰り返してきた。しかし、沖縄での研究活動、啓蒙運動に区切りをつけ上京して後の伊波は街頭から書斎へ戻り、一見社会から隔絶した沖縄学者のたたずまいを見せている。実際の所、大正末期に『孤島苦の琉球史』（春陽堂大正十五年、昭和元年）、『琉球古今記』（刀江書院、同）を書き上げて後の昭和戦前期の伊波は、『南島方言史コウ』

（楽浪書院，昭和九年）、『おなり神の島』（同、昭和十三年）、『日本文化の南漸』（同、昭和十四年）、『沖縄考』（創元社、昭和十七年）など重厚な民俗学的、言語学的な著書を次々と出版、社会の喧騒から自己自身を遠ざけているかに見える。

だがこのような伊波像は昭和戦前期の伊波の実像に迫り得ているであろうか。これら昭和期著書群の前にハワイ関係の諸論文を置き、第二次大戦末期における河上肇との思想的交流をその著書群に後ろに置いてみると伊波の社会意識は、大正末期から昭和期へと接続し、より一層深化しているのがわかる。民俗学的世界、言語学的世界の静謐さの下層流にひそむ同時代への伊波の強烈な危機意識。言論報国会など翼賛体制への関与に背を向けて市井の、在野の研究者としての生き方を貫いた孤高の沖縄学者。そのような昭和戦前期の伊波の実像を浮かび上がらせるのがハワイ移民関係の諸論文であり、元京都帝国大学教授・社会主義経済学者河上肇との交流であつた。そこに社会主義思想への「同伴者」としての伊波普猷の実像がある。

そのことを前提にして、ここで強調して置きたいことはなぜ伊波のような温厚な自由主義者が思想・言論統制の厳しい昭和戦時期に社会主義思想に共鳴し、その「同伴者」となったのか。翼賛体制に向かつてなだれを打つて合流して行く言論・思想状況。そうした時代状況から遠く離れて「沖縄学の灯」を細々とかざしながら「同伴者」の道を歩んだ伊波の思想的軌跡。大正末期の「琉球民族の精神分析」の中で、「沖縄県人はこれ以上暗示をかけられてもよいのだろうか。・・暗示ばかりかけられて、一部の人々の都合のいゝ奴隷になつてたまるものか」と激しく言い放った伊波―。沖縄の現状への悲憤と苦悩を経てぎりぎりの選択として社会主義思想に行き着いた伊波の思想遍歴。このことが本稿の主題に他ならない

思想の根源的衝激力が薄れ、人間の生き方が混迷・混沌へと向かう時代状況。きらびやかに時代を乱舞する思想、思想から思想へと移ろいやすく，人間の生き方が希薄になつた現代。これに対し思想が生き生きと輝きを放ち、人間の魂の根源に確実に迫る時代があつたと言うことを伊波普猷の生き方は鮮烈な形で示してくれる。そして、昭和戦時下「暗い谷間」の時代の日本でこの思想を選択することは、同時に自己実存をも生命の危険にさらすことにつながつたとの、事実を明記しておくべきであろう。このように、「生き難い」時代になぜ伊波が「生き難い」思想に自らを賭けようとしたのか。そのことがここで問われている課題なのだ。

（二）

さて、これまで伊波のハワイ関係の論文「布哇物語」（『犯罪科学』別巻「風俗資料研究号」昭和６年７月十日）、「ハワイ産業史の裏面」（『犯罪科学』２巻１号、昭和七年一月一日）に

ついては、マルクス主義的理論によるハワイ移民論という理解の仕方では共通しているものの、この論文を伊波の歴史論の中でどのように位置づけるかについては、十分な議論がなされていない。例えばこれらの論文を沖縄歴史研究の全業績の中で「異質」のものと見なす見解などがあるが、伊波の歴史思想を内在的に理解すればマルクス主義思想・社会主義思想への接近はハワイ訪問で突如として始つたのではなく、大正末期の思想転換を起点としていると見るべきである。このことについて筆者は、既に「啓蒙者伊波普猷の肖像—大正末期の思想の転換—」(『近代日本と伊波普猷』、三一書房，一九八一年）に論及したことがある。その思想転換を象徴的に示すのが大正末期の論文「琉球民族の精神分析ー県民性の新解釈ー」(『沖縄教育』第百三十六号)であると言うのが前記論文以来の筆者の考え方である。

この意味で伊波の一連のハワイ移民関係諸論文が実はその転換期を形作る重要論文「琉球民族の精神分析」の延長線上に成立した論文であつたと言うことである。とりわけ、ハワイ論文における経済的な下部構造への着目に両者の関連が濃厚に表れている。そのことは後で触れることにして、その昭和戦前期の実像に迫るために伊波自身が蘇鉄地獄へと転落する大正末期の現実を前に「琉球民族の精神分析」を執筆し、どのように自己の活動を総括したかを本論に入る前に見ていこう。それこそ伊波を内在的に理解することになるからである。大正１３年、伊波は「暗き滅亡の淵」(柳田国男)へと向かつていく沖縄の現実に対して、「今や本県の旧家は大分破産し、本県の銀行会社も亦破産に瀕してゐる」(「琉球民族の精神分析」）とし、更に、「沖縄の村々谷々は、衰亡の途を辿りつゝある」(「南島の自然と人」、『孤島苦の琉球史』附録）とも述べ、このように滅亡・破局に向かう現実の中で、自己も含めて政治家・教育者・実業家・牧師等々総ての領域のリーダー達が最早「個人的救済から社会的救済に眼を転ずべき」(「琉球民族の精神分析」）であると主張する。

個人的救済から社会的救済への転換—それは激化する社会的・経済的矛盾を前に、伊波の人間としての、学者としての、思想家としての転換の開始を告げる言葉であった。沖縄の向上を目指して、ほぼ二〇年にわたって展開した長き啓蒙運動の実りなきこの現実的帰結と経済的破局—大正一三年の伊波は、こうして苦悶と虚脱の裡で「琉球民族の精神分析—県民性の新解釈—」(右同）を執筆、その中で「今となつては、民族衛生の運動も手緩い、啓蒙運動もまぬるい、経済的救済のみが私たちにのこされた唯一の手段」(上同）と述べて自己の啓蒙運動の軌跡を省みる。

思えば、伊波にとって明治末期から大正期にかけて渾身の熱情を傾けた宗教運動・啓蒙運動・民族衛生運動は民衆の自己改造・意識変革を目指し、まさしく民衆個々の”個人的救済”・精神的救済を求めて展開された文化運動であった。そしてまた、民衆個々の個人的救済そのものこそが沖縄の政治・経済・教育・文化を向上せしめる唯一の方向であるとの揺るぎない確信が伊波にはあったはずである。だが、今や伊波は「暗き滅亡の淵」、破局の道へと向かう沖縄の現実の中で、痛苦をもって啓蒙運動も民族衛生運動もこの破局的事態に有効ではないということを認識しなければならなかった。したがって”個人的救済か

ら社会的・経済的救済”への転換を強調する伊波の言葉は、崩壊に瀕する沖縄全体の破局的事態に対する伊波の認識の転換を示す言葉であつた。その転換は、かつての民族衛生運動を自己点検する次の一文の中に鮮明に表明されている。

「その頃私は優生学の研究に没頭してゐたので、遺伝に重きを置き過ぎた結果、肉体上の解放（中略）を唱導して、一生懸命に民族衛生の運動をやつたが、私はこれには相当の結果があつたやうに思つてゐる。けれどもその後唯物史観を研究して人の意識が人の生活を決定するのではなく其の反対に人の社会的生活が人の意識を決定する、といふことを理解するに及んで、私は環境といふことをおろそかにしてはならないといふことを考へさせられるやうになつた。従つて沖縄がかうなつた原因をその制度に求めなければならないやうになつて来た。」（「琉球民族の精神分析」、傍点原文のママ）

伊波は、マルクスの著名な唯物史観の一節を引用し、そのような観点に立つてソテツ地獄へと向う経済的窮乏の原因を現在の「制度」に求めた。伊波のこの指摘は重要な意味を持つていた。と言うのも伊波は今や精神改革から制度改革への道を歩むとの決断を鮮明にしているからである。それは伊波にとって自らの思想の決定的な転回を意味し、さらに二八年のハワイ訪問によって伊波の唯物史観への転換は確固たるものとなった。ではその制度改革のために沖縄県人は何をなすべきか、あるいはどこに向かうべきか、これが当面の課題であつた。伊波は断固たる口調で言う。

「吾々沖縄県人はこれ以上暗示をかけられてもよいだらうか。最近思想界の大勢は「自由を求め解放を求めて止まざる生命力、個人性表現の欲望、人間の創造性を強調しようとする傾向」である。すでにこの生命力、創造性を肯定するからには、それに反対して働くすべてのものを排斥して進まなければならぬ。暗示ばかりかけられて、一部の人々の都合のいゝ奴隷になつてたまるものか。ラツセリは「教育はある特殊の信条を眞理であると思ひ込ましめるものではなく、眞理に対する欲望を長ぜしめるにある」といつた。三百年間奴隷の境遇に沈倫した琉球民族は再び奴隷的生活をおくることを好まない。私たちは租税や血税のみを納めて能事了れりとしてはならない。これらのものは奴隷さへも能く納め得るところのものである。私たちが納めなければならぬ最も尊い税は個性の上に咲いた美しい花でなければならぬ」

人間の生命力、創造性を強調するこの視点は、経済的な破局へと向う沖縄が切り拓くべき方向性を提示したものであつた。生命力、自己表現力、創造性を発揮し自由と解放を求める社会的勢力とそれを規制し抑圧しようとする既成の宗教家、教育家、政治家、資本家など外部勢力とのせめぎ合い―。これが伊波が進もうとする方向に横たわる二つの契機であった。こうして伊波は、沖縄の生命力、創造性を発揮する方向を目指し、「それに反対して働くすべてのものを排斥して進まなければならぬ」と断言し、外部の力、環境によって「暗示ばかりかけられて、一部の人々の都合のいい奴隷になってたまるものか」と内面の激しいたぎりをたたきつける。

なぜ温厚と言われた伊波がその生涯を通して例を見ないほどの激しさで憤怒を露にした

のか。伊波にとってこの経済的な破局が、島津支配三〇〇年間の「奴隷制度」の下で自由も創造力も奪われ、すべてを搾取し尽された事態の再来と認識されていたからであり、沖縄が再び「奴隷的生活」に沈倫するかどうかの瀬戸際と認識されていたからに他ならない。その意味で、「三百年間奴隷の境遇に沈倫した琉球民族は奴隷的生活をおくることを好まない」との伊波の強い決意は、そうした現状認識の反映であったと言える。

中央政府による租税の過重負担と搾取、他者（「他県人」）による経済的支配。そうした中で「惰眠を貪」る県民、「党争」、「分取主義」に「日も是も足らない」政治家。さらに「暗示をかけて人を奴隷化する魔術師」となった宗教家、忠君愛国的な「国民教育」を鼓吹し、「暗示をかけるのを教育家の能事」と考える教育家―。

こうした一切のものを排除し、沖縄の活路をどう切り拓て行くか。それはこれまでのように既成の権威に対して唯々諾々と盲従し、「血税や租税を納めて能事了れり」とすることではない。「私たちが納めなければならない税は個性の上に咲いた美しい花でなければならぬ」と伊波が万感の思いを込めて述べているように、自由と解放を求める人間の生命力の発揚、個人性、創造性等々を発揮できる新しい社会の構築を目指すことがこの閉塞状況を打破する方向と伊波は考えた。このように人間の個性が充分に花開く新しい社会の構築を目指する努力こそ、沖縄が納めるべき「租税」であり、「血税」であったのだ。「個性の上に咲いた美しい花」とはそのような努力の上に咲く花なのであつた。こうして唯物史観的な手法に立って沖縄の経済的な破局を総括し、新しい研究方法を模索していた時点に伊波はハワイ訪問の絶好のチャンスに巡り会うことになる。

（三）

伊波普猷が『実業之布哇』社主当山哲夫の招待でハワイを訪問したのは昭和三年（一九二八年）のことであつた。同年九月二十三日春陽丸で横浜港を出航、十月六日ホノルルに到着した。伊波のハワイ講演の詳細については資料的にも相当の量に上るので、ここではその概略にとどめ別論に譲る事とするが、伊波のオワフ島での講演行脚は先ずハワイ大学での九日午前の講演を皮切りに開始された。演題は「古代日本の鏡としての琉球」。この講演はハワイ大学での初の沖縄講演であり、大学関係者・内外の学生が参集し注目をあびた。伊波を含めて日本の研究者が同大学で学術講演をするのは異例のことであり、大学関係者の伊波講演への関心の深さがうかがえる。この講演について当山哲夫は以下のように熱い思いをこめて報告している。

「、、、、伊波氏の講演は流石に精錬されたもので原田博士の英語説明と相待つて内外の男女学生に特殊の興味を湧かしたものである。「古代日本の鏡としての琉球」その琉球はペンとノートを一生懸命に走らしつつある外人の学生には一種の智的インスピレーションの世

界であつたと思ふ。葬られた琉球？無視されたる琉球？卑しめられた琉球と琉球の人は今や不思議にも神秘の衣を剥ぐが如く伊波氏の英智によつて内外人の前に大胆に復活し新生し展開されてきたのだ。然り自己を把握し得ざる琉球人とその子孫，，，，把握することを，，，，表現することを恥たる琉球人は今や三百年来の伝統と因習と圧迫を蹴り飛ばして大胆に勇敢に自己を表現する機会を与えられたのだ。大学にある琉球人の子孫の魂に革命が若し起こらずとせばそれは化石されたものでなければならぬ」

当山によるハワイ大学講演記は伊波講演を生き生きと描いてその熱気あふれる様子をよく伝えている。同時に伊波講演がハワイの沖縄移民にどのように受けとめられたかを知ることが出来る。埋葬され、無視され、卑下された「琉球」ー。何よりも伊波講演は移民地でのこうした琉球像を根本から打破し、新しい琉球像を復活・再生するものであつた。長き歴史の圧政の中で、自己把握をためらい、自己表現を恥じた琉球人。その琉球人が「今や三百年来の伝統と因習と圧迫を蹴り飛ばして大胆に勇敢に自己を表現する機会が与えられたのだ」ー。一切の伝統・因習・圧迫を超えて獲得される自己把握と自己表現。ここに当山が伊波講演によせる熱い期待が表明されていると同時に、差別と偏見に苦しんだ沖縄移民の期待でもあつた。

実際の所、ホノルルでの伊波講演は当山の予想をはるかに越えて大きな反響を呼んだ。ハワイ大学についでヌァヌ国際青年会体育館で十月十二，十三日の両夜にわたって開催された公開講演会は、実業乃布哇社主催、日布時事社後援で行われた。初日は日布時事社長相賀安太郎司会のもとに「神話に現われたる日本建国の精神」と題して講演がなされ、二日目は伊波の宗教上の盟友比嘉賀秀（静観）の司会で「日本の国家観念の三変遷」と題して行われた。二つの講演はそれぞれが伊波の博識に裏打ちされた遠大な構想にもとづくものであり、両夜合わせて千人から千二百人の聴衆が詰めかけたといわれる。

ちなみに、佛教家西田天香など他の知名士の場合、ハワイの邦字二紙『布哇報知』、『日布時事』が書き立てても二、三百人にすぎなかつたが、伊波講演の場合「両夜共に以外の人気を呼び、満場溢るる如き盛況」であつたと新聞は伝え、更に「伊波氏の講演が斯くの如くレコードを破ったのは全く同氏の弁舌と琉球人一同の熱誠」とも伝えている。また、両講演ともにハワイの知識人の参加が目立ち、それらの中には新聞記者、領事館員、銀行家、商人、医師、教育家、学生などあらゆる方面の知識人を網羅した異例の講演会となつた。

ここで両講演について、詳細に触れるゆとりはないが、前者に於いて伊波は「日本建国の大精神」を国民の平等性を追求する所にあつたとし、その精神が日露戦争以降の西欧資本主義の「暴威」によって崩れ、「今日では事実に於いて日本国家は一部の金融機関の膝下」にあると断定した。後者の「日本の国家観念の三変遷」に於いては、日本の国家は「古代の純粋国家観念より近代の植民地民族などを含む混成的国家観念」に変わったとしたが、前者の講演を視野に入れると、第三の国家観念とは「一部の金融機関の膝下」にある「日本国家」と言うことになろう。こうしてみるとこの時期の伊波の問題関心は、現下の国家

像のありかたに向けられていたことが明らかとなる。

伊波がこの講演を行った昭和十三年（一九三八）とは、同年６月関東軍による張作霖爆死事件、治安維持法の改正と内外ともに軍部の台頭いちじるしく、外に日中戦争へ奔騰してゆく軍事的潮流、内に言論・思想を禁圧する治安維持法の拡大改正していく情勢であつた。こうした中で日本の国家像の行方を見定めようとする伊波の講演は、金融寡占体制へとなだれ込む日本国家への憂慮であつたと言えるかもしれない。

このことについてはまた後ほど触れることとして、もう少し伊波の講演行脚について見て置こう。前記講演についで同十四日夜、ワイキキ海浜のオーシャンビューインで開かれた県人有志主催歓迎会で伊波ははじめて琉球語による講演をした。これが後にハワイ・サンフランシスコ・ロサンゼルスで“伝説的”に語り継がれていく伊波自身による「純琉球語講演の皮切り」（当山哲夫）であつた。司会は後に日系移民の厚生問題に尽力した田島朝明。佛教家の玉代勢法雲、牧師の比嘉静観らの琉球語によるスピーチの後、伊波が八重山民謡を題材にした「蟹の歌と三味線」との琉球語講演を行い、盛大な拍手を浴びたと伝えられている。

ここで再び当山哲夫のこの講演に対する感想を引用してみよう。少し長くなるが、それ見ることで伊波の硬軟両様の講演スタイルが浮き彫りになるとともに、伊波講演が沖縄の歴史・文学・言語・民俗など多方面に及ぶものであり、単色な講演ではなかつたと言うことがわかる。

「日本語講演に巧みである伊波文学士は更に純琉球語に至ると一層巧妙で芸術的である。氏の琉球語の歴史及び民族講話を聞かされると今までの琉球人の欠点に心を痛め、且つ他を非難し攻撃し排斥する感情が一変して来るであろう。個人の欠陥と思ふてゐた琉球人の性格が歴史の罪、制度の罪であつたことにハツキリと気が付いて来る。そして何人もせめる心が消えて行くであろう。老いも若きも男も女も聴け、、、、伊波氏独特の歴史的事実にその熱弁に聴け、、、、『自己を知らざるものは主義も愛しえず』とは伊波氏の言葉であることを、、、、」

当山のこの報告記を読むと日本の国家像の在り方をテーマに遠大な課題を論じた一般公開講演と違い、ハワイ移民社会での沖縄人の生き方や沖縄の歴史・文化への自己検証といった身近な問題を琉球語でもつて話していたことがわかる。このことを通じて、伊波が差別や偏見に悩まされてきた沖縄移民に自尊心と矜持の回復を訴えた様子が伝わって来る。

この後、十九日伊波はワイパフ沖縄県人会主催の一般講演会で前記同様「神話に現れたる日本の建国精神」と題して講演、歓迎会の席上での琉球語による「歴史的事実」にもとづく講話。「一時間以上説かれた伊波氏の話術に来会者は深き感激に打たれた」と報告されている。翌二十日はエワ公正会主催の講演会。エワ耕地の日本語学園講堂で講演は行われ、多数の沖縄県人出席のもと、ここでも「日本国家観念の三変遷」の演題で「熱弁を揮」い、歓迎会に移り「一時間以上、得意の純琉球語で満場の聴衆に感激を与えた」と報告されている。エワ、ワイパフ両耕地の講演はいずれも「熱誠なる成功」であつた。

ハワイ大学、ホノルルでの公開講演、エワ、ワイパフでの沖縄移民向け講演などオワフ島での２週間の講演プログラムを終えた伊波は、ついで十月二十二日カウアイ島への講演行脚に出発した。カウアイ島での講演はケカハ、ワヒアワ、カラヘヲ、コロア、カパア、リフエ、ワイメアなどの各耕地を巡回して行われた。この後、三十日にホノルルに戻り、十一月一日から十日間の日程でマウイ島へ、更に十一月十五日から十日間の日程でハワイ島での巡回講演と伊波は精力的に動きまわった。マウイ、ハワイ両島の日程もカウアイ島のそれと同様に耕地から耕地への巡回講演の形をとり、伊波にとつては耕地における沖縄移民の生活の実態にふれる重要な機会となつた。この体験こそ後に執筆される一連のハワイ関係論文に反映されていると見るべきである。これらの各島各耕地における伊波講演はそれぞれの沖縄移民関係の有力者、有志、例えばオワフ島ホノルルの当山哲夫、カウアイ島の喜名朝猷、マウイ島のドクトル山城、ハワイ島のドクトル又吉など多数の支援者が積極的に支えた結果、各島各耕地で盛大な反響を呼んだ。

それは「三島各地で大成功を博した伊波文学士の講演会」、「馬哇（マウイ）嶋の講演大成功」、「白熱化したる布哇（ハワイ）嶋の講演会」との雑誌の見出しにも見て取れる。それにしても、過去のハワイに於いてこれほどの規模で展開された講演会は例がない。そこに伊波講演に寄せる沖縄移民の熱い思いが伝わって来る。伊波にとつってもこの巡回講演は、大正中期から始めた村から村へと駆け巡った民族衛生講演に次ぐ規模の講演活動となり、ハワイ滞在八十余日の内その講演回数は実に三十日前後に及んでいる。短時日の滞在と言うことから考えれば、この回数は驚異的な回数と言わねばならない。

このほか伊波はこの講演行脚でま比嘉静観・北山新城新次郎ら無産派の革新知識人と交流した。両者については、後ほど詳しく触れるが、とりわけ北山は『マウイリコード』記者として伊波のハワイ取材に重要な役割を果たした。

こうして伊波の講演行脚はハワイ移民地での長年の差別と偏見に悩まされてきた沖縄移民の「魂の解放」へとつながり、自己把握・自己認識・自己表現を求める“沖縄ルネッサンス”とも言うべき意識革命を引き起こした。このことについては、当山哲夫が伊波をハワイから北米大陸に送り出す際の送別の言葉にも表れている。

「先生は言語学以外に文学や芸術に造詣があり更に土俗学、考古学以外に社会科学―唯物史観―を極め、そうかといふと今度は宗教的情操にも豊富な力を持つて居られる。先生の人生観、世界観を窺がふて見ると深淵広汎のスペースとタイムを超越して限りなき美の世界―学問の世界に逍遥されている。（略）

更に県人の立場から観ると今まで琉球人と言わるのを肩身狭く感じていた青年達も一度先生の講演を聴くと忽ち自尊心を発揮されて『沖縄人は優秀民族なり』との誇りを呼び戻してくるものが少なくない。この一事だけで先生の來布は、非常な大収穫と言わねばならぬ」

ここには唯物史観を含む多方面の学殖の中から生み出された伊波の人生観・世界観によって自尊心・誇りを回復していく沖縄移民青年達の姿があり、伊波講演がまさに「琉球人

の子孫の魂に革命」の火を点火していく様相がみてとれる。かくして、伊波講演が巻き起こした“沖縄ルネッサンス”は沖縄移民の意識革命となって、島から島へ、耕地から耕地へ広がって行った。

この項の終わりに、伊波をハワイ講演に招聘した当山哲夫についても一言しておきたい。ハワイ沖縄移民史上、とかくの風評、評価にさらされているこの人物も３１年の仲井間事件以前は、比嘉静観と深い盟友関係にあり、『実業乃布哇』誌上における両者の活躍はハワイ言論界でも目覚しいものがあつた。静観のハワイ赴任以後その革新的な宗教活動を支援したのも当山であつた。また、当山は大正九年（１９２０）に勃発したオワフ島耕地労働者の第二次同盟罷工に際して、耕地労働者後援会のメンバーの一人としてこのストライキを支持し活躍した。しかし、仲井間事件の勃発とともに漢那憲和派の当山と労農派・無産派の静観・北山らと決定的に対立、ハワイ沖縄県人全体を巻き込む大事件となり、以後人心の支持を急速失って行った。大戦前には言論人として大きく転向、その影響力も凋落した。この意味で伊波招聘と講演事業は、当山にとってその影響力を発揮した最後の仕事となつた。

（四）

そのことは別論の課題として、伊波普猷が「布哇物語」、「ハワイ産業史の裏面」など一連のハワイ関係論文を公表したのは帰国してから三年後の昭和六年（一九三一）のことであつた。折りしも、日本国内では軍部の１部将校、大川周明らによるクーデタ未遂・３月事件が起こり、国外では同　年九月十八日、関東軍参謀らは満州占領を企てて奉天郊外柳条溝の満鉄線路を爆破。関東軍はこれを中国軍の軍事的行為として総攻撃を開始、ここに満州事変が勃発した。こうして、翌年三月の満州国、建国宣言と共に日中戦争は中国全土に拡大、国内では犬養ら政府要人を暗殺した５・１５事件によって政党政治は危機に瀕し、軍国主義の時代へとなだれを打って行った。

しかし、伊波はこうした時代潮流に惑わされることなく、ハワイにおける体験・見聞を静かに暖めながら次々と発表して行った。狂奔する時代思潮と対照的に伊波のハワイ論に登場するのは「賃金奴隷」となって喘ぐ日系移民の姿であり、日本移民の哀史であつた。「布哇物語」の中で伊波は当時の移民哀史を以下のように語る。

「・・・今から三十六、七年前の契約移民時の彼等の哀史である。或る時耕地支配人との間に軋轢が生じた為、数百名の日本人が数珠繋ぎとなつて、十五哩の悪路をヒロの裁判所に行列したともあつたといふ。当時の状態は宛ら一種の奴隷制度で、その間に幾多の尊き犠牲も現れて、各地に祭られている同胞の墓地には、医療が及ばないのではなく、非命の死を遂げたのも少くなばいとのことである」

このような日本移民の窮状の本質的な局面を抉ったのが『布哇産業史の裏面』であつた。伊波はこの論文の中で移民哀史についてこのようにも付け加える。

「彼等（初代移民）の大多数は、一生奴隷の境遇を脱することが出来ないで、布哇の土と化したが、その中にはダイナマイトの爆音と共に、吹き飛ばされたものもあり、甘蔗火事で火あぶりにされた者もあつたといふことである。各島の海岸には至る所に、かうした犠牲者の墓標が立つてゐる。大陸労働者の叫びと共に、彼の魂が叫び出す時もあるであろう」

初期移民の犠牲者の墓標・魂の叫び心に刻みながら書かれたこの論文は実はハワイ無産派の論客北山新城新次郎との思想的交流の中で生まれたものであつた。それについて伊波は論文の冒頭で、「二三年前布哇に遊んだ時、沖縄出身の移民にして『マウイリコード』紙の記者なる新城北山氏から日本移民の哀史を聞かされたが、中には未だ世に知られない事実があるので、これらを材料にして、布哇群島開拓の背景を画いてみたい」と執筆の動機を語っている。

このように、伊波に大きな影響を与えた北山とはどのような人物であつたか。これまで北山の本名について「銀次郎」とされているが、正しくは「新次郎」であり、どの論文でも「北山新次郎」と名乗っている。北山は今帰仁村の出身であるが、出生などその経歴はあきらかでない。１９２０年代の一時期ハワイ島で耕地労働に従事、その後マウイ島に転進、伊波訪問時には、『マウイリコード』の記者であり、ハワイ無産派の代表的言論人であつた。そのことは1925年に「現小作制度の欠陥と改善」(『実業之布哇』大正拾四年十一月)、26年に「此一文を先輩伊波文学士に献ぐ」との献辞のついた「布哇沿岸の琉球民族」(『会報』創刊号、布哇沖縄海外協会)、27年には「唯物史観の立場と日系市民」・「動物園と我等の連絡線」(『実業之布哇』昭和2年二月号）などと矢つぎ早に論文を発表していることでもわかる。

この他北山はハワイの有力邦字新聞『日布時事』(１９２９年１月８日１４)日)に「自作農案の正体」と題する論文を５回、更に同紙に「日露支三国と東支鉄道事件」(同年７月２３日－２９日)と題する堂々の国際関係論文を５回にわたって連載するなど多彩な文筆活動を展開している。いずれもマルクス主義の立場にたつた骨太い論文であり、その博識で達意の文章は左翼思想全盛期のハワイ言論界を代表する文章と言える。伊波マウイ訪問時にはその講演録を『マウイリコード』に掲載したとの記録があるが、マウイでの調査の結果残念ながら同新聞がほとんど現存してない事が明らかになつた。北山はまた前述の献辞に示されているように、伊波の影響を深く受けた人物であり、その論文「布哇沿岸の琉球民族」の中で伊波の大正八年の論文「俚諺とデモクラシー」を引用して以下のような考察を加えている。とりわけ、北山はこの論文で国家の一切の制度機関は国民の身体であり、国民の進歩発達があたかも古着を脱ぎ捨てて進むように、国家もまた古い制度から脱穀して新しい制度へと生まれ変らなければならないとの伊波のダイナミックな国家観に賛意を表明してこのように述べる。

「然るに日本の政治家は今も小さいときの着物を着せて国民に着物地獄を感じせしめてゐる。殊に我琉球に対しては古着ばかりではなく鎖までもかけて苦しめてゐるのだ。我々は疾うの昔にそんな着物は我々の身体に適応しなくなつてゐたのだ。だから既にそれは破られているべきであつた。・・・我々は過去２５０年間驚くべき被搾取民として苦しめられたことを記憶せねばならぬ。我々琉球民族は苦しむために生まれてきたのではあるまい。搾取されるために生まれて来たのでも何んでもないのだ。我々は我々を苦しめる一切の鎖を切断せねばならぬ」

このように、現在の日本国家の状態を「着物地獄」と痛烈に批判、「古着」の上に「鎖」までかけられている沖縄の現状からの脱却を切実に呼びかける。「着物地獄」とは国民の精神が日々進歩・発展しているにもかかわらず、国民を旧来の「古着」に緊縛し、その進歩・発展を押し止めている国家の在り方を指す。こうした国家の在り方に対し、島津支配以降二五〇年の被抑圧民としての記憶もとに国家の一切の鉄鎖を断ち切り、伊波が俚諺の中から導いた国家観、「衣装哲学」にもとずいて国家の変革を訴える。そこに無産派言論人北山の面目躍如たる面影がある。こうして布哇で出会った伊波と北山の間に思想的なスパークが起つても不思議ではない。そして何よりも重要なことはこの時期伊波自身の中で大きく史観の変化が起きていたことである。

このことについては既に冒頭で詳しく触れた所であるが、大正末期の沖縄の経済的破局、それつぐ昭和初期の蘇鉄地獄と呼ばれる経済的窮乏の極地、その破局の中で伊波は明治末期以降の啓蒙主義的・宗教的な沖縄救済の方向を離れ、経済的救済の方向にその重心を移し、「唯物史観」への関心、傾斜を深めた。この時、伊波にとつて北山との出会いはまさに決定的とでも言うべき出来事であつたはずである。伊波の中の社会主義思想への共鳴盤が北山との出会いで高鳴つた。こうして伊波が「賃金奴隷」として非命の運命に倒れた日本移民の「犠牲者の墓標」に哀悼の思いを寄せ、地底の奥深くに眠る「魂の叫び」に精神を傾注したの当然の成り行きであつた。これがハワイ産業史の知られざる裏面に伊波が切り込む背景であつた。

伊波の訪問時ハワイの内部事情、とりわけ日本移民をめぐる開拓事情、プランティション内の苛酷な労働状況などは、日本国内には正確に伝わつていなかつた。それだけに、北山を通してもたらされた「日本移民の哀史」は貴重な情報源であつた。実際の所、北山らは伊波のハワイ訪問時に同人雑誌「耕人」を発行、活発な文芸・思想活動と並行して調査活動を行なつていた。伊波の前掲論文の詳細にわたる産業統計は「耕人」同人のプランテーション（耕地）実態に調査に基ずくものであつた。そのような極秘のデータ、秘話を基にして書き上げられたこの論文は、日本移民の苦境を顧みず、「資本家はもとより、学者・宗教家・教育家も、・・ハワイを平和の仙郷」、「太平洋の楽園」と喧伝して止まなかつたその暗黒面を抉り出し、日本移民の苦闘する姿を適格に描いたハワイ移民研究史上に類例のない貴重な文献となつた。ここで再び本論に戻り伊波がハワイ産業史の裏面にどのような光を当てたかを追跡してみよう。とりわけ、伊波の関心は自身の思想転換をも反映して、

少数の資本家が支配しているハワイの独占的な経済体制．制度に向けられ、そこでいかに「法外な搾取」が行はれているかと言うことであつた。引用の文章はそのことを明白に証明している。

「この二産業(砂糖、パインなつプル)にたずさはる労働者は、両者合わせて約六万人に過ぎないが、これだけでも布哇の資本家制度の剰余価値の如何に膨大なるかがわかる。・・かうして現在の布哇の富は十億弗に達し、その年額の生産も亦約その一割即ち一億ドル以上に達している。・・然らば布哇十億の富を作るに与つて力のあつた労働者達は今如何なる結果にあるか。いふまでも無くその存在は資本家達の搾取機関としてのみ許されてゐる」

そればかりではない。初代日系移民は教育の無い人々が多かつたが、二世移民はいずれも現地で高い教育を受け、最近の「新思想」を学んだ世代であつた。その彼等に対しても「一坪の地面」さえ与えられず、「最早彼等の生活を保障」されない状態であつた。その上、その生産機関は「アレキサンダー・ボールドキン、キャスル・クック、アメリカン・ファクターズ、デビス、シー・プルア、ハワイアン・パインアップルの六わつの系統によつて独占」され、その政治・法制・教育、軍隊までも、これらの資本家の力によつて動かされ統制されていた。

このように、伊波の現状分析の視点はハワイの政治的・経済的「制度」に向けられていたが、それはまた北山の視点に通ずるものであつた。伊波滞在中の二九年一月に『布哇報知』紙上に発表された北山の論文「私の無産階級論」は「・・布哇のこれらの生産機関は幾つかの大資本家系統の独占になつてゐる。・・即ち、これら一握りの大資本家系統の人々は、布哇三十四万の社会人の上位に君臨し、他は悉くこれらの人々に従属すべき運命の下に置かれてゐる人間だ」と述べ、土地も生産機関も持たない三十四万のハワイ同胞の苦境をこう指摘する。

「彼等無産階級は一旦その労働力を支出することが出来ない場合は、例へば老衰したり病気したりする場合は、彼等は全く生産関係から駆逐されてしまふ。生死の問題は資本家の関する問題ではない。布哇の初代同胞は今総てこの不安の世界へ投げ込まれつつある階級人である。生産機関を持たない人々の惨めさ、一坪の土地も与えられていないところの次代同胞ーそれが布哇の先輩達の所謂前途有望な次代市民なのである」

こうしてみると、北山と伊波の両者は時と場所を異にしながらも共通の観点からハワイの現状を分析、日系移民の前途に憂慮の思いを表明したのであつた。そのことは同時に、伊波がハワイの無産者やその運動にいかに深い関心を持つていたかの証明ともなる。北山がその論文「私の無産階級論」で「現代の政治といふのことは、国際的にせよ、国内的にせよ、その持つ性質は『政治とは経済の集中的表現である』といふにあるのだ」と述べているように、伊波も北山の論文の一説を引用しこう述べる。

「かうした土地柄に於いて、無産者を親に持つ日系市民の前途は実に哀れなものと言はなければならぬ。彼等が如何に政治的目覚めたとしても、現代の政治が経済的の表現である限り、彼等は到底被抑圧階級の運命から免れることは出来まい。もし彼等に幾分前途が

あるとしたら、それは米国自身の資本主義の崩壊の秋でなければならぬ」。これが伊波の「ハワイ産業史の裏面」の帰結であつた。そこに北山を含めて一坪の土地も与えられない「次代同胞」への無限の同情の念が語られ、ハワイの資本主義体制の桎梏から逃れられない日系移民二世の運命が見通されている。それにしても、伊波がここで言う「米国資本主義の崩壊の秋（とき）」とはどのような事態を指しているのであろうか。

それは米国の資本主義体制の瓦解、新しい経済・社会組織の樹立を指していたのであろうか。あるいは、このような劇的な体制変革が到来しなければ無産者日系二世は永遠に「被抑圧者の運命」を逃れることは出来ないと考えたのであろうか。いずれにしても、ハワイ体験を通して現実の階級的な矛盾の解決を「資本主義の崩壊する秋（時）」に求める伊波の現実認識を視野に収める時、大正末期の沖縄の経済的破局を克服する方向として、個人的救済から経済的救済への転換を主張した伊波の急速な歩みを顧みざる
を得ないのである。ここにも「琉球民族の精神分析」から「布哇物語」・「ハワイ産業史の裏面」などハワイ関係論文への伊波の転換の足跡を読み取れるはずである。伊波にとってハワイはまさに長年蓄積してきた「唯物史観」の実験場であつた。以上の考察にもといずいて、伊波はこの論文を次のような厳しい一文で結んだ。

「以上述べたことによつて、海外に無産移民を送り出すことを『海外は発展』といふことの穏当で無いことが知れよう。布哇に於ける半世紀間の経験は、既にこの種の移民が永久に賃金奴隷であることを証明した」。

更に、「賃金奴隷」としての日本移民の地位は単にハワイのみに現れた現象ではなく、今後南米に於いても繰り返される現象とし、これまでの移民送り出し方を国内的な「人口調節策」を実現するための「海外吐出」、棄民と厳しく断定した。そして、伊波は華々く喧伝された国策としての「海外発展」に対置して「真の海外発展」策を提唱した。その真の海外発展とはこれまでのように海外吐出　・棄民としての移民ではなく、国家の責任の下に「一定の資本」を供与することによって海外移民地での移民の自立を図り、「賃金奴隷」への道を防止する方向をこそ模索すべきであると日本政府に提言した。まさに移民政策の根本的転換を促す伊波の提案であり、真の移民構想であつた。

このように「布哇産業史の裏面」の問題意識を見てくると、その社会主義主義理解は１９２０年代を風靡した公式的・教条的なそれではなく、移民社会の底流を貫く無産者・被抑圧階級・賃金奴隷など受苦者の声をハワイ移民史に刻む手法として沖縄学伊波が採った新しい方法であつたと言える。そこに社会主義的な手法を土台にした沖縄学者伊波普猷のハワイ移民論の真髄があつた。

最後に伊波が「一種のテロリズム的個人主義的悲劇」と述べた福永事件について論じてみたい。この事件は伊波がハワイ訪問の十日前の 1928 年 9 月 18 日に起こった戦慄すべき事件であり、犯人が日系二世青年であつたため人種問題も絡んで日系移民社会のみならず、白人社会にも衝撃的な波紋を広げた。伊波はこの事件について深い関心を持ち、帰国後二つの論文を書いた。その「テロリズム的個人主義的悲劇」の典型的な事例こそ、伊波が力

を込めて執筆した日系二世の青年による白人少年誘拐・殺人事件であつた。伊波は日系二世の悲劇を通じて追い詰められた移民青年の運命を描いた。

「布哇日系市民の殺人事件」(『犯罪実話』昭和十二年一月五日)と題する論文がその一つであり、更にこの続編として「布哇日系市民に公判記録一無産階級の声を代表した天才の犯罪」(同誌同年二月0日)との論文を書いている。この二つの論文は『伊波普猷全集』(全十二巻、平凡社)にも収録されていない論文で、伊波の布哇論との関連でこれまで全く論じられたことのない注目すべ論文である。そのことは後に触れるが、この事件が日系社会に与えた衝撃の例証としてハワイの代表的歌人日向春潮の短歌を掲出してみよう。日向は事件への衝撃と悲しみを次のように詠んだ。

貧乏にやつれし母の涙よりかなしきはなし此の天地に
やさし男も今し狂いて地にそむき、かなしやとがを背負いて生きぬ
貧しければ貧しき儘に道ありと説くよかなしきブルジョアの夢
マルクスの道も行われず、はた神の道も行われず、斯くて我等は何を叫ぶや
神を説き、仏を説けり、何かせむ、この天地に飯の足らねば
(『布哇報知』、昭和三年十二月二日)

日向はその短歌について「『さびしき大地』は、あの事件が突発した当時、私に直視された『痛ましい地上の姿』であつたのだ」と語り、「大地の温かさを慕う者のこゝろが、みじめな彼(福永寛)と彼の環境みつめて詠まずにゐられなかつた」と語を継いだ。このように福永事件はハワイのみならず、西海岸一帯の日系社会にも衝撃となって広がって行った。

このようにハワイ社会に衝撃を与えた福永事件直後、激高した白人グループが同青年の収容先の警察署へ押しかけ、リンチ・報復を試みるなど険悪な人種的対立の様相を帯び始めていた。しかし犯人の福永が従容として犯行を認め、贖罪への思い語る態度、優れた才能を持ちながら延ばせなかつた極貧の家庭環境などが明らかになるにつれて福永青年への同情の声が高まるとともにハワイ社会全体が生んだ罪との認識が共有された。この経緯について伊波はこう書いている。

「果たせるかな、ヤンキーたちはリンチすべく警察に押しかけた。早速軍隊の出動となつて、群衆との間に大衝突が演ぜられた。だがアメリカ人は聡明であつた。布哇大学の教授達が、日系市民は肉体の上では日本人だが精神上ではアメリカ人だから、彼の犯罪は当然彼を育んだ社会全体が負うべきものだといつたやうな意見を発表したので、民衆はすぐさま反省して憤怒の念忽ちかれの同情に代わりこの事件はやつと人種問題化される危険を免れた」

伊波はこの事件に経済的貧困に追い詰められた日系無産者二世の置かれた極限的な状況の象徴と見なした。ギル少年誘拐・殺害に到る福永青年の動機を分析する伊波の筆致はそのことを明瞭に示している。

「クキーン病院で人生の無常を感じた彼はシーサイドホテルに転職してから、変な世界を発見した。その世界はブルジョワの世界、遊逸な世界、賭博の世界であつた。いくら働いても家賃さへ払えない自家の貧困とローヤルハワイヤンホテルやシーサイドホテルに宿泊するヤンキーの豪奢ぶりとを較べて見た時、彼はこの世の矛盾に驚かざるを得なかつた。布哇信託会社（ハワイトラスト）の前家賃請求に、毎月のやうに母が泣かされてゐるのを見た時、資本家の無情と冷酷とに憤慨し、特に言葉の解らない母が下劣な集金人に虐められたのを病床中で見た時、復讐の念がむらむらと起つたとは、彼が告白したところである」。

高い志を持ちながらそれを実現する道を閉ざされた福原青年。「みじめな家庭」環境と青年の孤独。こうして福原は「どうにかして旅費をこしらへ旧式の両親を帰国させてから、思う存分に活動しようといふことばかり朝夕考へていた。その時に考へついたのが、米国資本家を脅迫して大金を巻き上げることであつた」

これこそ伊波が描く追い詰められた無産者二世の肖像であつた。なぜ彼はこれほどまでに追い詰められなければならなかつたのか。伊波の問いかけはそこにあつた。彼が直面する経済的的貧窮、それはまたハワイ移民問題で伊波が一貫して追求した課題でもあつた。

たしかに「布哇物語」、「布哇産業史の裏面」には巨大なハワイ資本主義のもとで喘ぐ民衆の姿が描かれていた。それは産業の少数寡占体制下で搾取され出口のない数量的な日系移民の姿であつた。だが、ここで描かれているのはその体制下で生きている人間がなぜ恐るべき犯罪に手を染めるに到ったかの深刻な問題であつた。伊波はそこに追い詰められた無産者二世の無残な実像を見たのである。伊波はこう指摘する。

「だが、かうした（優れた「資質を有する民族」）資質を遺伝された日系市民の境遇は、多くは福永のそれの如く、その天ぴんを発揮させるには、余りに貧弱否寧ろ悲惨である。彼等は米国の市民でありながら、猫の額ほどの土地おも与えらてゐない。現在の布哇の富を蓄積するために犠牲となつた日本人労働者を親として生まれ、その反哺の義務まで背負はされた彼等に対して、布哇の社会は十分なる教育と生活の保証とを与えてくれない」

ここに福永青年と同様に経済的貧困の問題を抱え追い詰められていく無産者移民二世の姿がある。しかもそれは単に日系移民家庭が直面している問題ではなく、他人種の家庭にも共通する問題としてあつた。

「要するに、この危険性は、布哇が今日の社会組織を持続する限り、日本人の家庭に於いてのみならず、他の人種の家庭に於いても、等しく温醸して、時到らば爆発せんとするもので、あらゆる条件が備わつた福永が真先に爆発した迄である」

ハワイ移民社会の深層に潜む現状破壊のマグマ。そこから噴出・爆発した「一種のテロリズム的個人主義的悲劇」。　福永事件とはハワイの寡頭的な社会組織への痛烈な一撃であり、棄てるものなき無産者青年の悲劇的反抗であり、伊波が言う「無産階級の声を代表した天才の犯罪」であつた。伊波は「布哇の資本主義制度内で育まれた日系市民の米国化の過程に、当然起こるべき問題の暗示」とのハワイの識者の見解を引用しながら、米国化と経済的貧困の問題が緊密に結びついていると考えた。この意味で真の米国化とは精神のみ

の問題ではなく、経済的自立をも保証されなければならないと言うのが伊波の結論であつた。

顧みれば、伊波が「布哇物語」、「布哇産業史の裏面」など福永事件関係論文も含め、それらを通じて一貫して追求したのは日系移民の経済的自立の問題であつた。経済的自立なくして精神的自立も移民社会の健全な発展もないということであつた。経済的貧困のために布哇の市民社会から疎外され、精神的苦悩の末にギル少年を誘拐・殺害し、「米国資本家」に攻撃の刃を向けた福永青年はその典型であつた。

福永のように極限的な形での自立志向は例外的であつたが、１９２０年代末期から３０年代初頭にかけてハワイの言論思想界では、実際経済的的自立を求める思想的潮流が渦巻いていた。その一つは社会主義的思想にもとずく無産者移民の経済的自立、もう一つは宗教運動を通じて一般信徒の経済的自立を求める志向である。

前者は新城北山に代表される思想潮流であり、後者は比嘉静観に代表されるそれである。それらに共通するものは無産者、宗教者はハワイの寡占的な経済体制の中でいかに生きるべきかとの切実な問いとして提起されていることであつた。それらの問題提起が蘇鉄地獄に瀕する沖縄の経済的救済を求めていたハワイ訪問時の伊波を強く打つたに違いない。実際の所、この時期ハワイの『布哇報知』・『日布時事』両紙の論壇は社会主義思想の全盛期をむかえていた。その潮流の一翼に沖縄移民新城北山もいたわけである。

（五）

さて、ここまで「布哇産業史の裏面」に示された伊波のハワイ理解の手法を見てきた。それは寡頭的な経済体制下で「賃金奴隷」として呻吟する日系移民の姿であつた。しかし、伊波のハワイへの関心はそれだけに止まるものでなく、社会学的・言語学的な関心へと広がりを見せる。「布哇物語」はそのような論文として読むべきである。まず、問、題関心の第一は、「人種的溶炉」 としてのハワイ社会がどのような経過をたどつて「アメリカナイゼーション」(米国化)されたかと言うことであつた。なぜ伊波普猷がハワイの地を踏んでこのような問題意識を抱いたか、それは近代日本と沖縄の関係性からの類推にあつたと考えられる。近代沖縄は 1867 年の琉球処分以降日本に組み込まれ、圧伏・同化の道を歩んだ。明治政府の同化政策は教育の現場で鮮明な形をとり、やがて沖縄の「国性剥奪」・「完全なる滅国」となり、「風俗習慣制度を滅却」した。伊波は沖縄の「社会化」(同化)の過程をこのようにとらえた。そこに伊波は沖縄文化の全体的な「剥奪」の様相を見た。だから伊波こう述べる。

「国家主義の人は能く統一々々といふがその所謂統一なるものは或る一部の人々が持つている特質のみを保存してそれに異な　つたものは片端から無くしてしまふのは余り感心

できぬ。成程悪い特質は理想的淘汰の理法によりてなくするのもよいが善い特質までなくするのはよくない。人各をして其の特質を発揮させてそういふもの等を包括して余裕のあるはたらきが真の統一といふものではなかろうか」

ここには「真の統一」(同化)を目指す伊波の志向がよく表れているが、近代沖縄の「統一」は伊波の志とは異なつて、沖縄の「特質」を全面的に否定するところから始まつた。このような同化経験を持つ伊波にとつてハワイの米国化はまさに近代沖縄の歴史を想起させるものであつた。そこから伊波はハワイの米国化についても沖縄の日本化と同様にカナカ民族の存在を重視し、「米国化(アメリカナイゼーション)の運動の基礎的人種」としてこれを位置ずけたのであつた。

言い換えれば、ハワイにおける米国化の方向性を近代的な文化を持ち込んで入植・移住した欧米人の功績に求めるのではなく、基礎的人種としてのカナカ人の人の民族的可塑性に見出した。この視点は明らかにこれまでの欧米人種中心のハワイ文明化論に対してカナカ人の主体性を尊重し、その民族文化を重視する地点に立つていたことを示している。そのことはハワイの歴史を概観し、「・・その文化の程度は存外高く、幾分科学的の知識をも有してゐて、宗教的には霊魂不滅を信じ、政治的にはかなり進んだ民主主義を奉じてゐた」とのべ、「カナカの民族性」について以下のように評価している所にも表れている。

「彼等は同民族以外のものに対しても、毛嫌ひなく、いつでも又どこでもアロハと呼びかけるが、彼等が単に口先ばかりのコスモポリタンでなく、天成のコスモポリタンであることは、その女性が好んで異人種と結婚しているのでもわかる。この雰囲気に這入ると無愛嬌の英国人も、そんだいな支那人も、葡萄牙人も、漸次「カナカ心」になつていくらしい。アロハこそは、実に「人種的溶炉」の燃料であつて、米国宣教師の説教以上に力を有するものである」

このように、伊波のカナカの民族性への評価は極めて高く、カナカ心・カナカ精神、あるいは愛、友情、好意などを表すアロハ精神こそカナカ民族文化の真髄と捉えた。この観点に立って、伊波は「米国人の抜け目のない設備（学校、協会などの文化施設）を以ってしても、布哇の自然と環境とその間に育まれたカナカの民族性を基礎とすること無しには、之（米国化）を遂行することは恐らく不可能であろう」と評価し、それこそが「米国宣教師の説教以上に力」を有すると断定した。

ここにも伊波のカナカの民族性への核心を衝く評価が語られている。このことと関連して、伊波がカメハメハ王朝の崩壊に触れて「この一世紀に最も注意すべきことは、１８２０年に米国伝道会社がハイラム・ブリンガムを主長とする宣教師団を布哇に派遣して、布哇併合の伏線を作つたことで、今日の布哇の大資本の多くが彼の後裔」と述べているが、そこにハワイ併合の真相が語られている。そもそも米国の牧師・宣教師は白人資本家の先兵として布哇に来て宣教・布教活動を開始したものであって，白人による大土地所有、プランテーション経営を合理化し、白人至上主義を推進するなどハワイの米国併合に積極的な役割を果たしたとされる。

伊波はこの事実を踏まえて、「近代欧州各国の侵略史を読むと、先ず宣教師達が入り込み、然る後に資本家の手先になる政治家が活動することになつてゐるが、布哇の宣教師達が、直接征服者となつてゐる例は他では到底見ることの出来ない珍現象である」とハワイ侵略史に厳しい視線を注いでいる。伊波のカナカ民族への評価はこのような侵略・征服史を体験しても強靭に生き続づく「カナカ心」・カナカ精神への評価あつたことを忘れるべきではない。こうしたハオレ（白人）中心・優位の宣教活動を批判したのは伊波ばかりではなかつた。かつて伊波と共に明治沖縄で革新的な宗教活動を展開したその弟子比嘉静観もそうであつた。静観がすべての既成の宗教活動を大胆にも否定、独自の「黎明教会」を設立した経過については、すでに「沖縄ディアスポラの思想―比嘉静観の宗教運動とその展開」（1・2・3、『みすず』４３巻７・９・１０号）、「比嘉静観の宗教運動とその思想的転換」（『日米における同化政策と２０世紀沖縄』科学研究費研究成果報告書、２００４年３月）などの論文で見てきた通りである。例えば、静観は既成の教会・教団を批判してこのようにのべている。

「私共は決して所謂教会や教団は組織しない。資本主義に依頼して何等その反省の無い教会や教団は資本主義と共に亡ぶべきである。・・今日の教会や寺院の制度は断じて彼等（イエス・釈迦などの宗教創始者）の精神を伝えるものでない。根本的反省と覚醒を持たねば滅亡を将来すること必然である」

既成の教会・教団批判ばかりではない。静観は192１年９月沖縄からハワイ・メソジスト教会の招聘で移住して以降、カナカ人への真摯な思いを寄せた特異な牧師であつた。以下の詩には静観のそうした思いがよく表れている。

嗚呼クヒオ王子

（前略）

嗚呼クヒオ王子／王統最後の／王子クヒオよ
楽園捨てて／君は行けり／今は何処に如何する

（略）

カナカは滅びんとす／あの偉大なる容霊は／この地球の楽園より
王統の運命のごと／将に消えんとす
おお生残の／若きカナカと／カナカの血統よ
神より遣されたる／使命に目覚めよ／生けるカナカよ

雲鮮やかに／ハイビスカスは／咲き乱るるに
哀れカナカは絶えんとす
悲惨なり／活花のコクリと／落ちしその如く
脆くも死せる／王子の傷ましさ

（後略）

布哇を救ひに来たりし／宣教師の子孫は／今や幾何の持ち主なりや
吾は敢えて／之を問はず
人々よ／黙して／布哇の現状を視よ
而して／叫べ／一切の解放を。

（『生命の爆音－比嘉静観詩集』一九二二年六月二五日、布哇ホノルル、キング　実業之布哇社）

ここにはカメハメハ王朝最後の王統クヒオ王子の死去に際し、滅び行くカナカ民族に無限の同情と尊敬の念を抱く牧者の思いが歌い上げられている。同時に、白人優位・宣教師専横のハワイの現状に対し、「而して　叫べ　一切の解放を」と呼びかける牧師の姿がある。

そればかりではない。静観はカナカ人、日本人、黒人などに対する白人・ハオレの人種差別に激しい批判を抱く牧師でもあつた。以下の詩はそのことを鮮明に示している。

「闘争」

隣のトムが／僕にカナカといふたとて／子供は家に帰って憤慨す
学校にも行かない子等に／すでに人種闘争の芽（めばえ）がある

優越なる白人よ／有頂天に威張る勿れ／有色人種を虐（しいたぐ）勿れ
野蛮なる文明人よ／黒人と黄色人を
人種闘争の同盟戦線へ／追いやるなかれ

（『人間・社会』、ホノルル市スミス街、実業之布哇社、一九二五年九月十日）

このような静観の詩群の上に、伊波の宣教師批判の文章を置いてみると、そこに伊波のカナカ民族への姿勢が明確に浮び上がる。それは現段階でハワイの米国化が最早避けられないものとすれば、カナカの民族性を基盤に行われなければならないとする見通しであつた。伊波のこの見通しは米国化の中で弱小民族となりつつあるカナカ民族の文化的復権を目指すものであり、今日のマイノリティ・エスニシティ問題に通ずる視点であって、明治末期の伊波が沖縄の文化的「個性」の尊重を日本全体に訴えた視点にも連動するものであつた。ハワイの民族社会を観察した伊波の脳裏を去来したものはまさに近代沖縄の日本化の問題であつたに違いない。その意味で「布哇物語」は伊波にとって琉球処分以後五十年を経た沖縄の総括とも読めるし、もう一つの「沖縄物語」に他ならない。

こうして見ると、ここでも伊波の視点は被征服者、弱小民族の上に注がれていることがわかる。次の一文を読むと伊波が「亡国」のカナカ民族に無限の同情の念を抱いていたことが了解される。

「十年前、時の憲政会代議士田中武雄氏は、欧米漫遊の途次ホノルルに寄港して、一場の演説をなし、『布哇に来た宣教師達は、カナカ民族に向かつて、天の神様を仰げよと説き，

彼等が天を仰いでゐる間に、下の方からこつそり地面を取上げてしまつた』と言ふ警句を吐いて物議を醸したとのこだが、実際『太平洋の楽園』の裏面には、かうした奇奇怪怪な事実がひそんでゐる」

第二の問題関心はハワイ移民社会の中での日本人の進むべき方向である。伊波はこの問題について日本人が偏狭なナショナリズム・「日本精神」に捉われることなく、ハワイの「人種的・社会的溶炉」に適応することを求めた。この観点に立つて伊波は排他的な「日本精神」をハワイ移民に植え付けようとする一部の言論・「愛国的無知(パトリオティツクイグノランス)」をこのように批判する。

「・・・彼等に日本精神を鼓吹しようとする人があるならば、思はざるの甚だしきものであると言はなければならぬ。世には彼等を二重国民性の持ち主にして、両国の契にしようとしてゐる人もあるが、さういふことが出来るものではなく、よし出来たとしても、徒にに民族的卑下心を起させるばかりで、ひいては恐るべき犯罪にも導くであろう」

思うに、伊波の「布哇物語」から滲み出て来るものは沖縄の歴史経験の陰影であり、それをハワイ移民社会に投影して成立したのが「布哇物語」であつたと考えられる。そのことは伊波が指摘する「二重国民性」、「民族的卑下心」の問題と沖縄の歴史経験との関連性に置き換えることが出来る。例えば伊波自身の『孤島苦の琉球史』の一節を引用してみよう。

「当時の琉球人は、日本人であるか、それとも支那人であるか、自分でもわかりかねたのであろう。当時の琉球人は、実に二重国籍者であつた。手短に言へば、島津氏は琉球人がいつもちゅゆうぶらりで、頗る曖昧な人民であること望んだ」

この一文は伊波の琉球史を貫く太い命題であつて、十七世紀の初等の島津侵入による琉球人の苦境を語つたものである。日清両大国の狭間にあつて「二重国籍者」として処遇されたことによる琉球人のアイデンティティの分裂、自己喪失。この帰結から招来された琉球人の奴隷主義、御都合主義への転落、民族的卑下心の惹起。伊波にとつてハワイの移民社会のあり方とこの歴史経験とは無縁のものと思えなかつた。だから伊波は日米両国の狭間にある日系移民が偏狭な「日本精神」によつて「二重国民性の持ち主」になり、自己分裂を引き起こすような事態の出現を回避すべく沖縄の経験を踏まえ、「愛国的無知」を厳しく批判したのであつた。

偏狭な「日本精神」批判・「愛国的無知」批判を通じて伊波が目指したものは何か。それこそが伊波が目指す「真正な米国化」であつた。それ故に伊波はハワイの実情を無視して偶さかの訪問の折に「日本精神を鼓吹する」政治家・学者など日本の識者の言動に対して「日系人に対して不親切であるばかりでなく、徒に米国人の猜疑の念を増さしめるもの」と痛烈に批判した。それでは伊波が目指す「真の米国化」とは何か。

それは１９２５年２月に発行された『アウトルック』誌の社説「加州と日本人問題」への伊波の賛意・共鳴に表れている。同社説は排日移民法の制定に触れ、「西洋系市民」と「東洋系市民」とを区別することは「必然南部諸州が背負ふたやうな極端な問題を醸すことで、

両人種の融和は到底のぞむことができない」とし、「かうした解決法は甚だ好ましからぬこと」と述べ排日移民法を批判した。そして、「真正の米国化」について「之に反して、日本人をして全心以つて、米国主義を奉じ、米国の生活標準に従はしめ、各米国市民に望む愛国心を彼等にも持たしめる事である」と強調した。これが同誌が主張した真の米国化であつて、「日本人問題解決の方法」でもあつた。伊波はこの方法を「卓説」とし、「米国の識者は日本人問題の最良法を既にハワイで実験した」と述べた。

こうして見ると伊波は米国化の問題を単に人種問題として捉えるのではなく、日本人問題の解決方法として考えていたことがわかる。と言うのも伊波がこの論文を執筆した当時、排日移民法の制定(１９２４年)以降満州事変などに象徴される中国大陸への侵略をめぐって日米関係は、緊迫の度合いを強め、日米開戦の声も高まりつつあつた。このような緊迫した事態の中で、日系移民が採るべき道は全身をもつて米国主義を奉じ、米国の生活基準に従う以外にないと伊波は考えた。これが昭和戦時期に伊波が主張した真の米国化の道であつた。そればかりではない。この米国化の道こそ「西洋系市民」と「東洋系市民」の壁を取り払い、「日米人の親善」につながり、同時に「日米関係の解決」にもつながる。

これが伊波が思い描く日米決戦の回避、日米親善協調の構想であつた。「布哇の使命」はまさにそこにこそあり、「真の米国化」に率先して参加することで日系市民はこの使命達成に「大いなる役割を演ずる光栄を荷ふこと」になると伊波は主張した。ここに非戦論者・反戦論者としての伊波の立場を見ることが出来る。このような日米非戦主義・協調主義の立場に立つ伊波がハワイの実情を顧みない「日本精神」・日本主義を強調する日本の識者の主張を容認できるはずがない。偏狭な「日本精神」に対して伊波が「愛国的無智」と厳しく批判した背景にはこうした伊波の明確な立場があつた。

(六)

顧みれば、「日本精神」と移民論が結びついた対外拡張主義的な殖民論に対する伊波の批判は大正末期以来の長年の主張であつたが、この主張が昭和戦時期に時局と衝突した事実が明らかにされたのは後に述べる河上肇との交流の中であつた。昭和十九年八月の河上宛伊波書簡の中で、「南島人の不幸な境遇を理解していただきたく便りにもなろうかと旧稿『南島に於ける国家意識の夜明け前』の切抜きを御目にかけます。結論は所謂日本精神にふれ、植民政策に言及した為に出して貰へず原稿も戻つてこなかつのですから後はご推察におまかせいたします」と伊波は自ら吐露している。この書簡から伊波が大正末期以来一貫して膨張的・排外的な「日本精神」に批判的であったことが読みとれる。そのことは旧稿の結論部分が戦時下の時局に相容れないものとして不掲載になつた事実に照らしてみても明らかである。

この旧稿「南島に於ける国家意識の夜明け前」は現在確認されていない伊波の重要論文の一つであるが、その結論部分で「所謂日本精神にふれ、植民政策に言及した」としている事からすれば、『古琉球の政治』の結論の延長に立つ内容ではないかと思われる。伊波は『古琉球の政治』の結論部分で古琉球の政治を分析した観点を当時の現実政治の動向に重ねあわせ、台湾・朝鮮併合を経て露わになって行く対外侵略の国家的機運を排外的・独善的な「日本精神」の発現と批判し、更に伊波はヴェルサイユ国際会議におけるウィルソン米大統領の民族自決宣言に拠りながら固有の文化を持つ他民族を併合しようとする侵略主義をも厳しく批判した。このように奥行きの深い背景を持つ伊波の「日本精神」批判の系譜がハワイにおける「日本精神」批判へと接続し、日米非戦主義・協調主義となって表出したものと言える。この流れに立って伊波の「日本精神」批判論を考察すると、それは昭和戦時期の伊波の位置を解明するキーワードと言えるかも知れない。例えば伊波と深い思想的交流があつた昭和十八年の河上肇日記の一節を読んで頂きたい。

「五月十三日(木)　『沖縄考』を読みし因みに、嘗て同じ著者の余に献本してくれし『古琉球の政治』を、羽村の書庫より探し出し来たりて、通読し了へ、その結論の特に今の時代にとって極めて痛切なるものあるを感じ、巻を覆うて歎息することやや久し。片々たる小冊子ながら、科学的な本であるから、公刊後年を経ること久しきに拘らず、最新刊の心地して読了する。」

河上が『古琉球の政治』を読んで、「今の時代にとって極めて痛切なるもの」を感じ、「巻を覆うて歎息」した「その結論」とは何か。それは既に述べたように排外的・独善的「日本精神」の発現としてアジアへの侵略・膨張へと向かう国家的機運への伊波自身の批判を指している。河上がこのように書いた昭和１８年戦局は中国大陸から太平洋へと拡大し続け、二月ガダルカナルからの日本軍の撤退、五月アッツ島玉砕と日本軍の敗色は濃厚になっていった。河上が言う「今の時代」の現実はこのように深刻な事態であつた。この現実の中で伊波の著書を読み、今の時代状況と二重写しにして「痛切」なものをみ、「歎息」する河上―。そこにはファシズムと戦った自己の後半生を振り返り、伊波の主張の正しさが証明されつつあることに「歎息」する河上の孤高の姿が映し出されている。

この時河上六十五歳、激動の人生を顧み自叙伝執筆に余念のない日々であつた。こうした隠棲の日々の昭和十八年一月、河上沖縄訪問から３０余年を経て書簡による両者の交流が再開される。伊波六十八歳の事であつた。この間河上は昭和三年２０年余の京都大学教授を辞職、社会主義的な政治実践の方向に人生の舵を切った。以後の河上は昭和四年の新労農党の結成への参加、昭和七年日本共産党への入党、昭和八年の検挙に到るまで一路実践の道を歩む。昭和十三年獄中非転向を貫いて出獄。このようにマルクス主義への信念とファシズム体制下で苦しむ国民の解放の願望が結合して河上の強烈な政治的実践は展開された。アカデミズムの世界から激流の渦巻く政治の世界への河上の転回はその求道主義的な生き方と相俟って国民的な反響を大きく呼んだ。マルクス主義、社会主義思想に共鳴していた伊波にとつても河上の献身的な生き方は無縁のものではなかつたはずである。その

ことは昭和十三年に出獄し、以後政治の世界から身を引き、隠棲生活を送っていた河上を昭和十八年十二月京都に訪問、交流を再開しているところにも表れている。

この思想的交流の意味を鮮やかに示したものこそ前掲の伊波から河上宛の書簡であり、河上の日記であつた。そこで伊波は「南島に於ける国家意識の夜明け前」で日本精神に触れ、殖民施策に言及したため原稿が不掲載になつた事実を河上に苦衷をこめて語った。河上はまたかつて伊波から贈られた『古琉球の政治』を読み、深い感銘の裡にそれが同時代に持つ意味を「痛切」に感受し、そこに伊波のファシズム体制への批判を読みと取った。更に、伊波から贈られた「布哇物語」などハワイ関係論文に対し、「・・かうした時機に科学研究の結果を、それを世間へ発表するについては、その影響をよくよく顧慮しないといけない事かと存じます。折角自重なさいませ。・・」と述べ、この時代状況の中で研究成果を公表することに伊波の自重を求めた。河上が言う「かうした時機」とはどのような時代状況を指しているのか。

それは両者の交流が始まった前年の昭和十七年に起こつた「横浜事件」に見られるように、太平洋戦争下の言論弾圧の熾烈な状況を指している。この事件では神奈川県特高警察のでっちあげによる共産党再建謀議の容疑で、雑誌編集者ら数十人が検挙された。また、苛酷な取調べで獄死者四人を出し、雑誌『中央公論』・『改造』が廃刊に追い込まれた。このような時代状況を背景にしながら河上の伊波への忠告を見ると、伊波の「科学的研究」の上に振りかかるかもしれない言論弾圧を憂慮する河上の姿が浮かび上がると共に、書簡の文字の行間に「科学的研究」さえも容認しない戦時体制の暗い影が滲み出ている。

こうして見ると、伊波のハワイ論は河上との戦争末期の交流の中で重要な位置を占めていたことがわかる。このことは伊波が河上に「布哇物語」を戦争末期におくり、そこでこの雑誌そのものが発禁となつた事実を書簡で述べていることからも理解される。
更には旧稿「南島に於ける国家意識の夜明け前」が時局の忌避に触れ不掲載になったことからも容易に推測がつく。そうした事実を河上に真情を込めて伝えること自体、伊波が戦時下の言論抑圧に妥協しない姿勢を示すものであり、伊波自身のハワイ論・ハワイ体験がこの戦時下の時代状況に拮抗する精神・魂の拠り所であることの証明でもあつた。
先に引用した河上宛伊波書簡もそのことを明瞭に示している。

実際の所、先に引用した伊波の論文「布哇日系市民の公判－無産階級の声を代表した天才の犯罪」(『犯罪実話』) の結論部分は、内務省の検閲によって大幅にｘｘとの伏字(ふせじ)となっていて判読不明である。結論の部分は福永青年の死形執行の場面であるが、おそらく当時の治安維持法による風俗紊乱、公序良俗への違反の理由にもとずく削除、伏字ではないかと推測される。

諸般の事情を考慮に入れて見ると、発禁処分になった雑誌は、「布哇物語」を掲載した『犯罪科学』ではなく、「布哇日系市民の公判－無産階級の声を代表した天才の犯罪」を掲載した『犯罪実話』ではないかと考えられる。と言うのも、『犯罪科学』には全く伏字で検閲された形跡はなく、明らかに伏字・検閲処分を受けたのは伊波の論文だけだからである。い

ずれにしても、伊波は自己のハワイ関係論文によって明白に治安当局から言論抑圧の衝撃的な処分を受けたのである。河上が伊波の「科学的研究」の上にふりかかるファシズムの魔手に憂慮の意思を表明したのは、こうした背景に基ずくものであった。

しかも、伊波がハワイ関係の論文を発表したのは、当時交流のあった柳田国男の民俗学関係の雑誌でもなく、東京帝大など官学が主宰する正統的な学術誌でもなかった。『犯罪科学』、『犯罪実話』と言えば、正統に対してまさに異端の風俗雑誌であり、時に猟奇的・扇情的であり、昭和期のエロ・グロを象徴する雑誌でさえあった。だが、１面それは戦時体制の中で鬱屈（うつくつ）した当時の世相が求めた欲望のはけ口の場であったことも間違いのない事実である。

柳田や周辺の親しい人々にも秘匿（ひとく）し、貧窮の生活事情があったとはいえ、そこに自己の思想・信条の真実の表現の場所を求めざるを得なかった伊波のぎりぎりの表現行為を思う時、それは当時の社会の底辺に最も近接した地点に立った伊波の自己表出の形であったと言えるかもしれない。

こうした事情を総合的に判断して見ると、昭和戦時期の民俗学的・言語学的世界の静謐（せいひつ）さは外見上のものであって、その底流には時代の動向に妥協しない伊波の精神の確執があったと見るべきである。例えば、それはその唯一の学問上の弟子と見なされる仲宗根政善の以下の証言でも明らかである。

「昭和１３年５月に、国民精神文化に研修に行く様うに言われて、久しぶりに上京して、中野の塔の山の先生の近くに家を借りて、御邪魔を乞うた。最初にを訪ねした時、国民精神研究所では、紀平正美などが、神ながらの道を説いているようだが、あんなのは学問ではない、うちへ来て勉強するがよい、ときびしく言われた。超国家主義・軍国主義へと傾斜しつつあった時で、日本の進みつつある方向をきびしく批判し、憂えておられた。」

この仲宗根証言には極めて重要な情報がおり込まれている。その１つは伊波の痛烈な紀平正美（きひらまさみ）批判である。紀平は１９１９（大正８）、学習院大学教授に就任、東大・東京高師などの講師を兼任。３２年（昭和７年）、文部省が設立した国民精神研究所の所員となった。同研究所は「日本教学の精神的支柱建設の文部省が設けた研究機関」（『日本近代史辞典』）であった。その目的は「わが国体・国民精神の原理を闡明（せんめい）し、国民文化を啓培（けいばい）し、外来思想を批判し、マルキシズムに対抗するに足る理論体系」の建設を目指すものであった。

紀平正美はこの研究所を基盤に太平洋戦争前後、国家主義的・国粋主義的な言論を展開、右翼思想の強烈な鼓吹者となった。紀平の「神ながらの道」とは、この思想を背景にして展開された万世一系の天皇を現人神（あらひとがみ）として戴（いただ）く国体思想であり、そのような皇国思想を臣民としての国民に実践することを求めるものであった。これに対し、伊波が「あんなのは学問ではない」と言い放つたとの仲宗根証言は、ファッショ的な時代潮流に妥協しない伊波の孤高の姿勢を垣間見せてくれる。

排外的な「日本精神」・国粋主義に対して伊波が一貫して批判的であり、ハワイ関係論文

でもそれが強く打ち出されていたことはすでに見てきて通りである。そして、その姿勢は戦時下に突入するにつれていよいよ確固たるものとなっていくことを仲宗根証言はしめしている。

このことに加えて伊波が河上にオワフ第二次争議のリーダー堤隆の著書『布哇労働運動史』を送っていることに注目しなければならない。河上日記の中にこう記されている。「昭和十九年九月十日・・・伊波君より布哇労働運動史を送り来たる。中に「驚くなかれ疎開四十万人、死者尚ほところを得ず」云々の文字記入されあるに気付く。琉球一流の倉庫の如き墳墓、今は防空壕と化せるにや」。

河上日記の記述から伊波が『布哇労働運動史』の中に一大決戦となっていく沖縄戦前夜の状況が書き込まれていたことがわかる。伊波が河上宛に送った書籍の中に敢えて書き込みをしたのは、沖縄の戦況を書簡にすれば軍事上の機密漏洩にあたる恐れがあるとの判断によるものであり、そこには同年８月の学童疎開船対馬丸撃沈の悲劇も含まれていたはずである。伊波が書き込んだ「死者尚ほところを得ず」とはそのことを指す。こうした事実から浮かび上がって来るのは、戦時下の監視体制の厳しい雰囲気の中で、両者の交流が続けられたことである。それにしても、このような状況下で伊波がなぜ河上に堤の『布哇労働運動史』を送ったのであろうか。

伊波がオワフ第二次労働争議のリーダー堤隆の『布哇労働運動史』を第２次大戦末期に河上に送った理由については、いくつか上げることが出来るが、その最大の理由はハワイの「産業的資本専制主義」に対抗して自由を求めて決起した労働運動の実態が生々しく記録されていること、更にはその資本専制主義と現下の日本の経済体制との類似性を見出していたことではないかと思われる。その「産業資本専制主義」について堤は、このように述べる。

「布哇の産業界特に製糖耕地は全然耕地会社の専制治下に置かれてある。それは製糖会社が先ず土地を占有し館府（きゃんぷ）を建築し設備を整えて後労働者を招致したので労働者は、耕地に入るや否や衣食住の生活一切会社の意に従はざるべからざる運命に遭遇するのである。彼等には住居の自由を許されない」

このような資本専制主義の実態と日本の現状とを伊波は重ね合わせ、一切の自由を剥脱された現状への思いを河上に伝えようとしたのではないかと思われる。実際、ハワイでの伊波講演は昭和期の日本の国家像について、「今日では事実に於いて日本国家は１部の金融機関の膝下」にあると述べ、国民的な平等性が失われていると説いていた。伊波は明らかにハワイの資本専制主義と現在の金融寡占体制とを重ね合わせ、それからの脱却する方法を模索していた。それでなければ、労働運動も翼賛体制の下に組み込まれたこの時期に１種の「危険文書」と見なされるこの本を河上に送るはずがない。

こうして、「産業的資本専制主義」に抗して人間としての自由を求めた日系移民の労働運動への共鳴を通じて、伊波はファシズム体制下でも労働運動への信頼を手放さなかつた。そして、その労働運動への信頼を伊波に強烈に植えつけたのもハワイでの見聞であり、比

嘉静観、新城北山らとの思想的な交流であった。伊波が堤の『布哇労働運動史』をハワイで入手したのもこれらの革新的なハワイ言論人との交流を通してであつたことはほぼ間違いない。と言うのも、伊波の宗教上の盟友静観は１９２１年にハワイへ赴任した翌年には『生命の爆音』と題する第１詩集を公刊、その中でオワフ第二次争議に触発されて１連の「労働詩」さえ公表しているからである。次の詩はその１節である。

（前略）
労働運動の進行曲（マーチ）は世界中に響く
識者　資本家よ
民衆　労働者よ
智情意と生命と世界民衆の動力の渾融なる
烽火の紅焔は挙がりつつある
おお熾（さか）んなるかな
美しき輝きよ
（後略）

このように、「産業資本専制主義」の苛酷な奴隷制的な支配の打破を目指して立ち上がる日系移民の労働運動を敢然と支持し、それを讃歌する詩を１９２０年代初頭のハワイで歌い上げたのは、静観以外には存在しなかった。そこに抑圧された経験を持つ沖縄出身ならではの思いが表出されている。「布哇産業史の裏面」で日系移民の苛酷な労働状態を分析した伊波が静観らの日系移民労働運動への共鳴と支援に無関心であったとは考えられない。伊波が河上にこの時代に「危険文書」と見なされる『布哇労働運動史』を送ったのは、その延長線から発する行為であつたと言えるのではないか。河上に送った同書の中に伊波が書き込んだ疎開の阿鼻叫喚と戦争前夜の沖縄の混乱した状況。しかし、そうした中でも社会を動かす力は労働者であり、労働運動であるとの信念を伊波が手放さなかったことを河上との戦時期の交流は切実に今の時代に伝えている。

すでに見てきたように、伊波にとってハワイはまさに満洲事変以降の中国侵略で緊迫する日米関係を非戦・協調・親善の関係へと転換できる位置として想定し、「布哇の使命」もそこにあると断言もしていた。ハワイで偏狭な「日本精神」の鼓舞する動向に対して、伊波が「愛国的無智」と批判した背景には、こうした伊波の明確な立場があった。しかし、ハワイにかけた伊波の日米非戦・協調の夢は、１９３９年の真珠湾攻撃、日米開戦によって無残にも打ち砕かれた。伊波はこれをどのように見ていたであろうか。それは敗戦後の以下の文章がすべてを物語っている。

「ひるがえって日本の情勢を見ると極端な国家主義、軍国主義に基づく政治運動が始まり、戦争の危機の迫ったと言ふことを名として、人民の生活を無視した軍備拡張を支援し、軍部の青年将校と提携して、暗殺手段によって平和主義の指導者を圧迫し、中華民国に対

する侵略を計画して、自派の勢力拡大をはかった」

このような伊波の終戦直後の昭和史への総括を読むと、伊波が目指した「平和主義」の国家像が鮮やかによみがえる。まさに伊波のハワイ体験、ハワイで希求した国家像はそこに連結するものであったことは疑いのない事実である。

北米・ハワイにおける沖縄県人会の設立と活動目的の変遷

前門　晃

1．はじめに

海外沖縄系社会と沖縄社会、海外沖縄系社会と海外沖縄系社会間のネットワーク化が進みつつあるように感じられる。海外沖縄系社会から自分のルーツを沖縄にたどる、琉球芸能の交流、沖縄へのスタディーツアー、WUB(Worldwide Uchinanchu Business Association)設立、世界のウチナーンチュ大会など、海外沖縄系社会と沖縄社会、海外沖縄系社会と海外沖縄系社会間の人・情報の流通が頻繁に行われるようになってきている。このような海外沖縄系社会と沖縄社会、海外沖縄系社会と海外沖縄系社会間のネットワーク化が進んできた背景には何があるのかを、海外沖縄県人会の定款から探ることが本研究の目的である。

2．北米・ハワイにおける沖縄系社会（沖縄県人会）

北米アメリカには 25,300 人、ハワイに 45,000 人、カナダに 1,300 人の沖縄県系人が暮らしている（Okinawa Centenial Celebration Issei Commemorative Booklet Committee, 2000）。各地で沖縄県人会を組織し、ハワイではハワイ沖縄連合会（Hawaii United Okinawa Association）（ハワイ州オアフ島）（会員数：10,000 人）、北米では、サンディエゴ沖縄県人会（Okinawa Kenjinkai of San Diego）（カリフォルニア州サンディエゴ）（会員数：500 人）、北米沖縄県人会（Okinawa Association of America, Inc.）（カリフォルニア州ロサンゼルス）（会員数：2,000 人）、北カルフォルニア沖縄県人会（Northern California Okinawa Kenjinkai）（カリフォルニア州サンフランシスコ）（会員数：210 人）、サクラメント沖縄県人会（Sacramento Okinawa Kenjinkai）（カリフォルニア州サクラメント）（97 人）、ワシントン州沖縄県人会（Okinawan Club of Washington State）（ワシントン州シアトル）（会員数：212 人）、ユタ州沖縄県人会（Utah Okinawa Kenjinkai）（ユタ州オグデン）（会員数：45 人）、アトランタ沖縄県人会（Atlanta Okinawa Kenjinkai）（ジョージア州アトランタ）（会員数：400 人）、フェイエットビル沖縄県人会（Faietteville Okinawa Kenjinkai）（ノースカロライナ州フェイエットビル）（会員数：61 人）、ジャクソンビル沖縄県人会（Jacsonville Okinawa Kenjinkai）（ノースカロライナ州ジャクソンビル）（会員数：106 人）、ワシントン D.C.沖縄会（Okinawakai of Washington D.C.）（ワシントン DC）（会員数：300 人）、ニューヨーク沖縄県人会

(Okinawa American Association of New York)（ニューヨーク州ニューヨーク）（会員数：200 人）、米国東海岸沖縄県人会（U.S. East Coast Okinawa Association）（ニューヨーク州ニューヨーク）（会員数：158 人）、ニューメキシコ沖縄県人会（New Mexico Okinawa Kenjinkai）（ニューメキシコ州アルバカーキ）（会員数：36 人）、ゆいまーる会（Yuimaru Kai）（フロリダ州）（会員数：20 人）、タンパベイ沖縄県人会（Tampa Bay Okinawa Kenjinkai）（フロリダ州タンパベイ）（会員数：53 人）、フロリダ沖縄県人会（Florida Okinawa Gyukai）（フロリダ州ペンサコラ）（会員数：40 人）、シカゴ沖縄県人会（Chicago Okinawa Kenjinkai, Inc.）（イリノイ州シカゴ）（会員数：300 人）、中西部沖縄県人会（Midwest Okinawa Kenjinkai）（イリノイ州）（会員数：42 人）、アラスカ沖縄県人会（Alaska State Okinawan Kenjinkai）（アラスカ州アンカレッジ）（会員数：39 人）、アリゾナツーソン沖縄県人会（Arizona Tucson Okinawa Kenjinkai）（アリゾナ州ツーソン）（会員数：36 人）、インディアナ沖縄県人会（Indiana Okinawa Kenjinkai）（インディアナ州インディアナポリス）（会員数：32 人）、オハイオ沖縄友の会（Okinawa Tomonokai of Ohio）（オハイオ州ポーウェル）（会員数：126 人）、カンザス州沖縄県人会（Kansas Okinawa Kenjinkai）（カンザス州）（会員数：16 人）、コロラド州沖縄県人会（Colorado State Okinawa Kenjinkai）（コロラド州コロラドスプリング）（会員数：60 人）、DFW 沖縄県人会（DFW Okinawa Kenjinkai）（テキサス州アーリントン）（会員数：59 人）、沖縄友の会（Okinawa Tomonokai）（テキサス州オースティン）、DFW チャンプル沖縄県人会（DFW Chanpuru Okinawa Kenjinkai）（テキサス州）（会員数：35 人）、エルパソ沖縄県人会（Elpaso Okinawa Kenjinkai）（テキサス州エルパソ）（会員数：25 人）、沖縄県人会パート 2（インターネット県人会）（Okinawa Kenjinkai Part 2, InterNet）（テキサス州）（会員数：270 人）、沖縄友の会（Okinawa Tomonokai）（テキサス州）、沖米文化普及協会（Okinawa America Culture and Association）（ペンシルベニア州 Ellenwood）（会員数：170 人）、ミシガン沖縄県人会（Michigan Okinawa Kenjinkai）（ミシガン州）、沖米沖縄県人会（Okibei Okinawa Kenjinkai）（メリーランド州シルバースプリング）（会員数：127 人）、インディアナ州沖縄遊友会（Indiana Okinawa Yu-Yu-Kai）（インディアナ州）、ペンサコーラ沖縄県人会（Okinawa Kenjinkai Pensacola, FL）（フロリダ州）、カナダでは、バンクーバー沖縄県友愛会（Vancourver Okinawa-ken Yuaikai）（ブリティッシュコロンビア州バンクーバー）（会員数：291 人）、カナダ沖縄県人連合会（Vancourver Okinawa-ken Yuaikai）（ブリティッシュコロンビア州バンクーバー）、レスブリッジ沖縄県人会（Lethbridge Okinawa Club）（アルバータ州レスブリッジ）（会員数：130 人）、カルガリーオキナワンクラブ（Calgary Okinawan Club）（アルバータ州カルガリー）（会員数：54 人）、トロント球陽会（Toronto Kyuyo Kai）（オンタリオ州トロント）（会員数：138 人）であり、ハワイとロサンゼルスが沖縄県人会の会員数として最大規模となっている。

ハワイでは各島にカウアイ沖縄県人会（Kauai Okinawa Kenjin Kai）、マウイ沖縄

県人会（Maui Okinawa Kenjin Kai, 450 家族以上）、ハワイ島にフイ沖縄（Hui Okinawa）が組織され、また、出身市町村・字単位で、地域ごとにも沖縄県人会が組織されている。出身市町村・字単位、地域ごとの沖縄県人会は、泡瀬同志会（Awase Doshi Kai, 1925 年設立）、字具志川同志会（Aza Gushikawa Doshi Kai, 設立年不明）、字与儀同志会（Aza Yogi Doshi Kai, 1930 年設立）、美東同志会（Bito Doshi Kai, 設立年不明）、北谷村人会（Chatan Sonjin Kai, 1927 年設立）、小橋川クラブ（Club Kobashigawa, 1966 年設立）、本部クラブ（Club Motobu, 1927 年頃設立）、我謝与那城同志会（Gaza Yonagusuku Doshi Kai, 設立年不明）、宜野湾市人会（Ginowan Shijin Kai, 1912 年宜野湾村人会、浦添村人会として設立）、宜野座村人会（Ginoza Sonjin Kai, 1949 年設立）、具志頭村人会（Gushichan Sonjin Kai, 1930 年代初期設立、30 家族、2000 年 176 家族）、具志川市人会（Gushikawa Shijin Kai, 設立年不明）、南風原クラブ（Haebaru Club, 1937 年設立、60 家族）、羽地クラブ（Heneji Club, 1928 年設立、旧羽地村 13 字 26 家族）、ハワイ勝連町人会（Hawaii Katsuren Chojin Kai, 浜比嘉クラブとして 1936 年設立、1981 年勝連町人会）、ハワイ佐敷・知念同志会（Hawaii Sashiki-Chinen Doshi Kai, 設立年不明）、ハワイ首里・那覇クラブ（Hawaii Shuri-Naha Club, Inc., 1927 年設立）、ハワイ八重山郷友会（Hawaii Yaeyama Kyoyu Kai, 設立年不明）、フイ アル クラブ（Hui Alu Club, 設立年不明）、フイ マカアラ（Hui Makaala, 1946 年設立）、フイ オ ラウリマ（Hui O Laulima, 1968 年設立）、フイ うるま（Hui Uruma, 設立年不明）、石川市人会（Ishikawa Shijin Kai, 1930 年設立、美里 Uyebo Uyeho Jin Kai として設立）、糸満市人会（Itoman Shijin Kai Inc., 1922 年糸満一世クラブとして設立、1998 年高嶺村人会、三和同志会を糸満市人会に統合）、兼城村人会（Kanegusuku Sonjin Kai, 1926 年設立、33 家族）、金武町人会（Kin Chojin Kai, 1908 年マウイ島ラハイナ、オアフ島キパパ、カハルウで設立）、北中城村人会（Kita Nakagusuku Sonjin Kai, 設立年不明）、東風平町人会（Kochinda Chojin Kai, 1934 年設立）、コハラ沖縄県人会（Kohala Okinawa Kenjin Kai, 設立年不明）、久場 Rosei Kai(Kuba Rosei Kai, 設立年不明）、国頭村郷友会（Kunigami-Son Kyoyu Kai, 設立年不明）、南中城村人会（Minami Nakagusuku Sonjin Kai, 設立年不明,13 字）、名護クラブ（Nago Club, 1905 年名護町人会として設立、125 家族）、西原町人会（Nishihara Chojin Kai, 1938 年西原村人会として設立）、沖縄市・越来村（Okinawa City-Goeku Son, 設立年不明）、恩納村人会（Onna Sonjin Kai, 1947 年設立、27 家族）、小禄字人クラブ（Oroku Azajin Club, 設立年不明）、小禄同志会（Oroku Doshi Kai Inc., 設立年不明）、大里同志会（Osato Doshi Kai, 設立年不明）、玉城村人会（Tamagusuku Sonjin Kai, 1928 年設立、12 家族、1999 年 150 家族・個人）、豊見城村人会（Tomigusuku Sonjin Kai, 1935 年設立）、浦添市人会（Urasoe Shijin Kai, 設立年不明）、ワヒアワ沖縄郷友会（Wahiawa Okinawa Kyoyu Kai, 1934 年設立）、屋我地同志会（Yagaji Doshi Kai, 設立年不明）、読谷クラブ（Yomitan Club, 1927 年読谷村人会として設立、大人 51 人、子供 125 人、現

在 367 家族)、与那原町人会 (Yonabaru Chojin Kai, 設立年不明)、与那城町人会 (Yonashiro Chojin Kai, 設立年不明) である。研究会や若者の会も組織され、ハワイヤングオキナワ (Young Okinawans of Hawaii, 1980 年設立)、ハワイ沖縄系図研究会 (Okinawan Genealogical Society of Hawaii) がある。古いものでは名護クラブ (Nago Club, 1905 年名護町人会として設立、125 家族) が 1905 年に組織され、県人会として 100 年以上の歴史をもっている。

北米沖縄県人会 (Okinawa Association of America, Inc.)、ハワイ沖縄連合会 (Hawaii United Okinawa Association)、マウイ沖縄県人会 (Maui Okinawa Kenjin Kai) は県人会館を有している。

3. 沖縄県人会の定款

県人会の会員数が最大規模となっている北米沖縄県人会 (Okinawa Association of America, Inc.)、ハワイ沖縄連合会 (Hawaii United Okinawa Association) の定款から県人会の活動の目的をみていく。北米沖縄人史編集委員会 (1981)、Kobashigawa (1988) に記されている北米沖縄県人会の定款の中の目的を拾うと、

在米沖縄県人会規約 (1934 創立) (北米沖縄人史 1981 p.104)
「第 3 条会の目的：会員相互ノ親睦ト扶助、智徳ノ啓発、並ビニ体育
二世教育ノ補佐
必要ト認ムル場合、故国援助」

北米沖縄協会 (1941 創立) (北米沖縄人史 1981 p.151)
「目的：相互扶助、福利増進、日米親善」

北米沖縄クラブ規約 (1954 創立、1966 改正) (北米沖縄人史 1981 p.454)
「第 3 条目的：本会の目的は会員の親睦と相互扶助並びに福利増進を図るにあり、必要に応じては一般社会福祉に協力する」

By-Laws of the Okinawa Club of America(1966 revised version) (History of the Okinawans in North America, 1988 p.277-279)
Clause 3. Purpose
「The purpose of this association shall be to promote friendship and mutual aid among its members, to provide for their general welfare, and to work towards the general welfare of the community as the occasion arises.」

となっており、最近の北米沖縄県人会の定款の中の目的は、

Bylaws of the Okinawa Association of America(2004)
「The purpose of this corporation is to operate a nonprofit organization for the education, study, promortion and preservation of Japanese/Okinawan music, dances and culture and to promote scholarship.」
となっている。

また、最近のハワイ沖縄連合会の定款の中の目的をみると、

Bylaws of the Hawaii United Okinawa Association(2006)
「HUOA is organized exclusively for the charitable, educational, and literary purposes (a) to promote, preserve, and perpetuate the Okinawan culture; (b) to perform community service; (c) to support and encourage education; (d) to conduct cultural programs, arts and crafts exhibits, demonstrations, and athletic and social activities; (e) to print, publish, and/or distribute Okinawan cultural and historical information and books; (f) to provide and encourage member associations to sustain their membership and cultural activities unique to the individual associations.」
となっている。

北米、ハワイにおいて沖縄県人会の設立の初期の段階では、県人会の活動の目的が会員の親睦、相互扶助、子弟教育にある。このことは、ハワイの出身市町村・字単位、地域ごとに創られた沖縄県人会の活動の目的にも見て取ることができる。最近の沖縄県人会の活動の目的は沖縄文化・日本文化の継承・普及に変化してきている。沖縄県人会の活動を支える沖縄県人会館の建設もなされてきた。

移民初期の時期は、自己で道を切り開く必要があり、頼るものは家族、沖縄県人であったため、県人会を組織し、その目的は会員の親睦、相互扶助、子弟教育となったのではないだろうか。最近では、先人が築いた基盤の上に生活をしており、自分とは何だろうということを考えるのに頼れるのが沖縄、海外沖縄社会であり、県人会の活動の目的が沖縄文化・日本文化の継承・普及につながったのではないだろうか。また、県人会の活動を支える県人会館の建設、維持には資金が必要であり、資金の工面にはネットワーク化が必要となったのではないだろうか。

参考文献

北米沖縄人史編集委員会（1981）:『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ、866ページ。

Ben Kobashigawa translated (1988) : History of the Okinawans in North America(Hokubei Okinawajin Shi). The Okinawa Club of America, 608pp.

Okinawa Centenial Celebration Issei Commemorative Booklet Committee (2000) : To Our Issei. Okinawa Centenial Celebration Issei Commemorative Booklet Committee,164pp.

リマにおける若い世代の沖縄県系人のアイデンティティと社会関係

ー2006年ペルー調査の結果を中心にー

野入直美

Ⅰ．研究の過程における異文化体験と学び

この章は，ペルーにおける沖縄系・日系の団体の概説（Ⅱ節），沖縄県系人の意識調査のデータとその分析（Ⅲ節），沖縄系の若者たちのアイデンティティについてのワークショップの記録（Ⅳ節），そして考察（Ⅴ節）からなっている。

本論に入る前に，筆者が行ったペルー調査の背景について述べておきたい。

この調査は，私が2006年2月に，10日間，ペルーのリマ市に滞在して行ったものである。私は，ペルー沖縄県人会などの関係団体の協力を得て，沖縄県系人を対象とするアンケート調査と，若者たちが集まってアイデンティティについて話し合うワークショップを行い，さらに関係団体・組織を訪問した。私は，ペルーにおける沖縄系の人々のうち，とくに3世以降の若い世代の人々の文化継承や，彼らのアイデンティティに関心を持っていた。

このとき，ペルーの沖縄県系のコミュニティは，沖縄移民 100 周年記念祭を盛大に祝って，1ヶ月ほどが経過したころであった。沖縄系の人々が，祭典の熱気と興奮のほてりを残しつつ日常に復帰している時期に，私はリマを訪れた。

調査には，自身も日系ペルー人で，14 歳のときにリマから沖縄に家族で移住してきたというルーツをもつ国吉サオリさんに，リサーチ・アシスタントとして同行してもらった。そのため，国吉さんの友人たちの，濃く温かな相互扶助の関係性の中に，私もいっしょに入れてもらうことができた。

これは，ペルーにおける沖縄系の人たちの関係性に関心のある私にとって，得がたい体験となった。国吉さんの友人たちは，深夜にわれわれを空港に出迎え，日曜日には沖縄県人会に連れて行き，調査協力者を探し，自宅に招いてペルー風の鶏肉入り沖縄そばとクリオーリョ料理がいっしょに並ぶ豊かな食卓を体験させてくれ，時間が許す限り仲介者，通訳者，ドライバー，カメラマンとなり，調査を全面的にバックアップしてくれた。

この人たちは，沖縄での留学や研修の経験を持っており，ペルーの沖縄系コミュニティのために献身的に働いている，3世のリーダーたちであった。彼らは，ペルーと日本の価値観の違いをよく理解しており，私と調査対象者・協力者の人々を，きわめて巧みに仲介してくれた。私に日本語でこまやかな気配りをしたかと思うと，次の瞬間には闊

達なスペイン語で，ペルー式の明るく率直な語り口でワークショップ参加者のムードを盛り立てている，そのような優秀なリーダーの姿をまのあたりにできたことは，この調査における大きな収穫となった。

研究の方法についても，得がたい助言をもらった。一人ひとりに話を聞くインタビュー調査よりも，十数名が集まって話し合う方が，お互いの考えを知ることができて参加者にとっても有益だという提案で，若者のアイデンティティについてのワークショップは実施された。

ペルー滞在中，沖縄で感じる以上に，沖縄系の人々の沖縄らしさを感じることがしばしばあった。沖縄系の集いでは，若者は年長者を「兄さん」「姉さん」と呼び，年長者はいつも後輩たちを心にかけていることが印象に残った。ペルーに生きる沖縄系の人々は，ペルーらしい明るさや粋なたたずまいとともに，現代の沖縄では珍しいほどの「ウチナーの肝心」をもつ人々であった。

（写真１　調査でお世話になったアントニオ譜久原さん，パトリシア譜久原さんと。卓上にはもちろんインカ・コーラ）

Ⅱ．ペルーにおける沖縄系コミュニティと団体・組織

１．ペルー沖縄県人会

ここでは，調査結果に入る前に，ペルーにおける沖縄系，日系の団体・組織について概略する。

沖縄県のデータによると，2005年のペルーにおける沖縄県系の人口は66542人であり，日系人の約7割にのぼるとされている[1]。世代については，いくらかの1世は健在であり，団体・組織の代表はほとんどが2世であるが，3世が中堅・若手のリーダーとして活躍し始めている。そして，5世の子どもたちが育ちつつある。

関連する団体・組織としては，ペルー沖縄県人会（1912 年～），ペルー日系協会（1917 年～），ペルー婦人会（1955 年～），沖縄婦人会（1978 年～），エスタディオ・ウニオン協会，AELUCOOP，ラ・ウニオン総合学校，ラ・ヴィクトリア校，サンタ・ベアトリス幼児学園，ホセ・ガルベス学校，ヒデオ・ノグチ学校などがある。ここには，日系の団体・組織も入っている。「日系に占める沖縄系の人口比が大きいために，日系の組織の運営や活動は，とくに戦後は，実質的に沖縄系の人々が中心的になっている」という語りは，何人かの沖縄県人会の人々から聞かれた。戦前は「ナイチ（内地）」の人々の方が，日系社会において大きな力を持っており，沖縄系に対する差別もあったが，彼らはペルーにおける日系人の迫害と困窮の時代をともにくぐりぬけた。また，ペルー生まれの 2 世が中心的な時代になってからは，「ナイチ」と沖縄の融合を図ろうとする動きの方が優勢だという[ii]。

沖縄県人会の会員数は，調査時で 1000 世帯弱であった。2 世が若かった時代には，リマで自営業をしている家が多く，会員数は現在よりも多かったという。サラリーマン家庭が増えると[iii]，郊外にある県人会まで家族みんなで来られる人が少なくなった。また，日本への出稼ぎは，県人会で活躍するはずの若い世代の男性の数を，ごっそりと減らしている。そのせいもあって，会員は男女がほぼ半々だが，実際によく働いているのは女性たちだという声も聞かれた。出稼ぎは，若い日系人の男性の数を減らし，その結果として，沖縄系，日系の女性たちとペルー人男性との結婚の機会が増えている。その場合，父親や子どもといっしょに県人会にやってくるケースと，県人会からは離れてしまうケースがあるという[iv]。会員数の減少は，沖縄系だけでなく，日系社会全体が直面している問題でもある。

リマ市の中心部から車で 1 時間以上かかるアテ地区に沖縄県人会館が建設されて，25 周年を迎えた。この建物（写真２）と設備は，当時の西銘沖縄県知事の肝いりでできあがった（写真３）。県人会館の建物と並んで，サッカーグラウンドや水泳プールなど，大勢が家族づれで楽しめる施設が整った。県人会館では，ビジネスの会合ももたれている。子どものための折り紙や太鼓のクラス，成人向けの琉球三味線のサークルなどもある。日曜日ごとの，高齢者の昼食会を楽しみにしている人も多い（写真４）。

沖縄県人会が直面しているもうひとつの課題は，次世代，とくにリーダーの育成だという。予算の問題で，留学生や研修生の沖縄への受け入れが抑制されていることが，大きく響いている。留学や研修に広く扉が開いていた時代には，ペルーの沖縄系の若者たちは，それを励みにして，日本語 3 級などの目標を立てて研鑽を積むことができた。また，留学や研修から帰ってきた若者たちは，リーダーとなって沖縄系コミュニティを引っ張っていっている[v]。仕事の少ない沖縄には，出稼ぎ目的で行くことも難しいため，留学や研修は，若い世代にとってきわめて貴重な機会だと考えられている。私の調査をサポートしてくれた国吉さんの友人たちは，沖縄で留学，研修し，青少年を沖縄に引率した経験を持っていた。その下の世代に，このような世代間継承の循環がうまく続くか

どうかは，留学・研修の機会が保障されるかどうかにかかっている。

また，ある県人会の役員は，沖縄で生まれ育った子どもや若者が，ペルーに来てホームステイをし，ペルーの沖縄文化に触れて，ラテン文化と沖縄文化の融合について学ぶことも定期的に行いたいと語った。ペルーと沖縄で，若者が相互に行き来し，お互いに学びあうことが望ましいと考えられている。

さまざまな厳しい状況がある中で行なわれた移民 100 周年記念祭は，県人会の人々に大きな希望を与えた。「沖縄に行ったことがない人も含めて，ここにいるみんながウチナーンチュなんだと感じました」と，沖縄県人会のある役員が語ってくれた。

（写真２　ペルー沖縄県人会で，国吉さん（左）と筆者）

（写真３　ペルー沖縄県人会の敷地にある西銘知事の銅像）

100周年記念祭には，ペルー在住の沖縄系の人々を中心に，沖縄やその他の国々から沖縄系の人々が参加し，約9千人が集う大イベントになった。この祭典は，1世にスポットライトを当てつつも，4世，5世の子どもたちを積極的に位置づけた。沖縄系の子どもたちは「たのもし（もあい）」を行い，その資金で樹木を購入し，沖縄県人会館の庭に植樹をした。また，100周年記念祭の1年前から，沖縄県人会館の敷地の壁に，それぞれの郷友会の絵を描いた。そこには，エイサーや大綱引き，沖縄の海や動植物の作品が，いきいきと描かれている（写真5）。

（写真4　日曜日の昼食会を楽しむ沖縄系の高齢者たち。卓上にはおいしいてびち汁。）

沖縄県人会の傘下には，沖縄市郷友会などの郷友会がある。例えば，沖縄市郷友会の会員，約300世帯は，自動的に沖縄県人会の会員にもなっている。沖縄市郷友会は，郷友会としては最大で，1979年にコザ市同志会，泡瀬同志会，美里村人会が合体して設立された。美里と泡瀬の村人会は1920年代からの歴史を誇っていたのだが，1978年に沖縄市長がペルーを訪問し，沖縄市との交流のために，ぜひ合併を進めてほしいと要請したという[vi]。現在の沖縄市郷友会は，サッカーチームの強豪さで響いている。また，郷友会独自の留学生制度を持っており，ペルーに帰ってきた若者が子どもたちに三味線や陶芸を教えるなど，交流・文化活動も盛んである。今後は，日本語のクラスを作るなどのプランもある。

このような郷友会組織の充実ぶりは，沖縄県人会と他の日系の県人会との大きな違いとなっている。沖縄系の人々は，子どもも若者も，「オオギミ・サッカーチーム」や「キ

タナカグスクの三味線サークル」などに属していることがある。一方，沖縄系ではない日系の人々には，ほとんどの場合，郷友会は存在しない。ある青年は，日本からペルーに戻ってきた後，沖縄系の子どもたちに，「村や市があるのは沖縄だけだった？」と尋ねられたという。

沖縄県人会の婦人会も盛んである。会員は 300 人ほどだが，声をかければ 500 人ほどが実際に動くという。1978 年に設立された組織で，当時も現在も，日系の女性団体の中で最大である。週に 2 日の琉球舞踊の集いでは，1 世の女性が後輩たちを導く。手芸やカラオケ，もあいの集いもある。設立当初は，病人を見舞ったり沖縄系の貧しい世帯を支援したりして，相互扶助の機能も果たしていたが，現在は会員相互の親睦と，文化・芸能の継承が主になされている。また，沖縄県人会の催しでは，受け付け，茶菓子などの接待，裏方全般を担う。ただ，彼女たちの多くは中高年である。ペルーの沖縄系の若い女性たちの中には，出稼ぎで日本に行って，これまでのペルーの日系社会の因習を離れ，自立意識やチャレンジ精神を身につけてくる人や，出稼ぎに行った家族の支援で大学に進み，専門職につく人が増えてきたという。中には，1 世の女性たちに敬意を抱きながらも，女性が県人会活動において補佐的な役割を請け負いがちであることに疑問を抱く人もいるという声を聞いた。

ただし，現在の婦人会が，高齢の女性たちの親睦と文化継承において重要な役割を果たしていることは間違いない。沖縄県人会の敷地にあるあずまやで女性たちが集っているとき，そのすぐ隣にあるゲートボール場では，彼女らの夫たちが楽しんでいる。その向こうからは，子どもや孫たちがサッカーや水泳に興じている歓声が聞こえていた。

（写真 5　100 周年を記念して沖縄系の子どもたちが描いた絵）

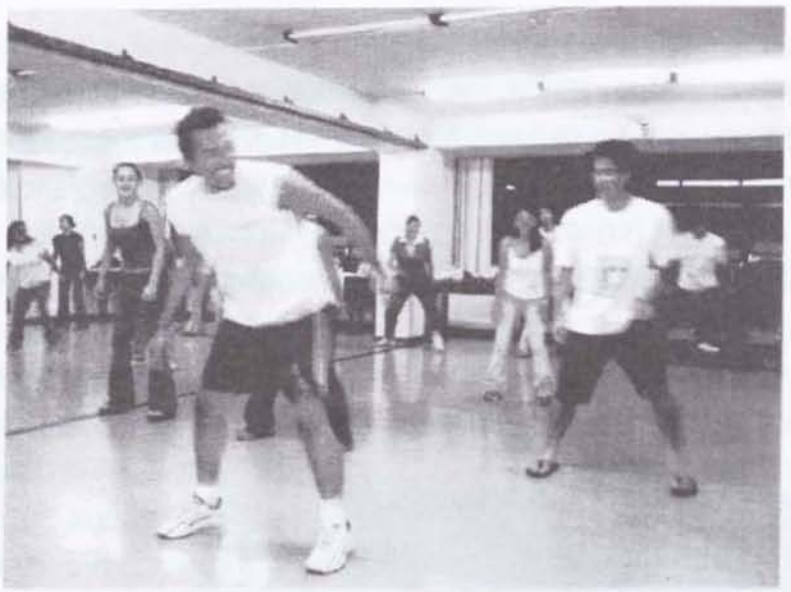
2．日秘文化会館

日秘文化会館は，1963 年にペルー政府が，第二次世界大戦中と戦後の日系人への迫害に対して，とくに日系コロニアの土地を没収したことに対しての賠償として出資し，日系人とペルー社会の友好，また日系人によるペルー社会への貢献[vii]の象徴として建設された。3 階には，ペルー日本人移住史料館が常設されている（写真６）。

熊本県人会や福島県人会など，沖縄県人会以外の都道府県の県人会は，この建物の中に事務所を持っている。沖縄県人会は，ペルーの日系社会の中で突出して人口が大きく，強い凝集力と活発な活動を誇っており，「日系」の会館には入らずに，別の会館を持っている。このことは，ハワイの沖縄県人会と類似している。

（写真６　日本人移民 80 周年を記念して設けられた移住史資料館）

日秘文化会館には，日系以外の人でも入れる。リマ市内にあることもあって，平日も朝から晩まで人がたむろしている。1 階にはラウンジ，日本料理店（沖縄そばもメニューにある），金融機関の窓口，売店，千人を収容できる日系人劇場（ホール）などがある。ペルーの沖縄系の人なら，1 階をうろうろすれば，たいてい，親戚か友人に会えるようである。2 階より上のフロアには，沖縄以外の県人会，ペルー日本人移住史料館の他に，図書館（移民の資料，日本の新聞，日本留学のための教材や情報誌，日本の漫画などがある），日本語教室，高齢者が集うための部屋，ペルーのダンスを練習できる広いフロア（写真７），琉球三味線などのサークル（写真８）や催し物のための研修室・会議室がある。



（写真７　ペルーのダンスを練習中）

（写真８　琉球三味線を練習中）

日本語のクラスは，幼稚園から中学生までを対象に，週に 3，4 回，行われている。私は土曜日の午前 8 時半から 10 時半の授業を見学したのだが，8 歳から 11 歳の子どもたち 7 人が，習熟度別のクラスで学んでいた。帰国子女のためのクラスもあり，ここでは 15，6 歳の生徒たちが 4，5 人で学んでいた。

3．ペルー日系協会

日系協会は，約 700 世帯の会員を擁する，すべての日系人のための団体である。日秘文化会館に事務所がある。日系協会には，沖縄系の世帯も入っている。

日系協会には，６７の加盟団体がある。沖縄県人会を含む各県人会が合計24団体で，その他はラ・ウニオン校などの日系の学校や，地方にある日系協会の支部などである。

この団体の主要な目的は，1世から伝えられた日本文化，習慣を，3世以下の世代に伝えていくことである。「1世は子どものためにたいへんな苦労をし，2世はそれをまのあたりにしているので禁欲的な努力家が多いが，3世は黄金時代に生きていて，人生の選択肢が多い。日系ではない私立の高級な学校に通ったり，国際結婚をしたりする中で，ペルー社会に統合され，いいこともあるが，日本文化が薄まっていく危険もある。」と，ある役員は語ってくれた。文化継承のため，日系協会では，日本大使館と協力し，地方に日本文化を伝えに赴くキャラバンなどを積極的に行っている。

ペルーの日系人社会は，沖縄系よりも早く，1999年に移民100周年記念祭を祝った。そのときは，沖縄県人会を含む全ての県人会が参加した。この式典で披露するために，琉球三味線やエイサーのサークルができるなど，沖縄系のコミュニティの活動も活性化したそうである。その成果は，2006年の沖縄移民100周年記念祭で披露された。このときは，ペルーの日系人社会全体で沖縄移民100周年を祝ったと，日系協会の役員が語ってくれた。

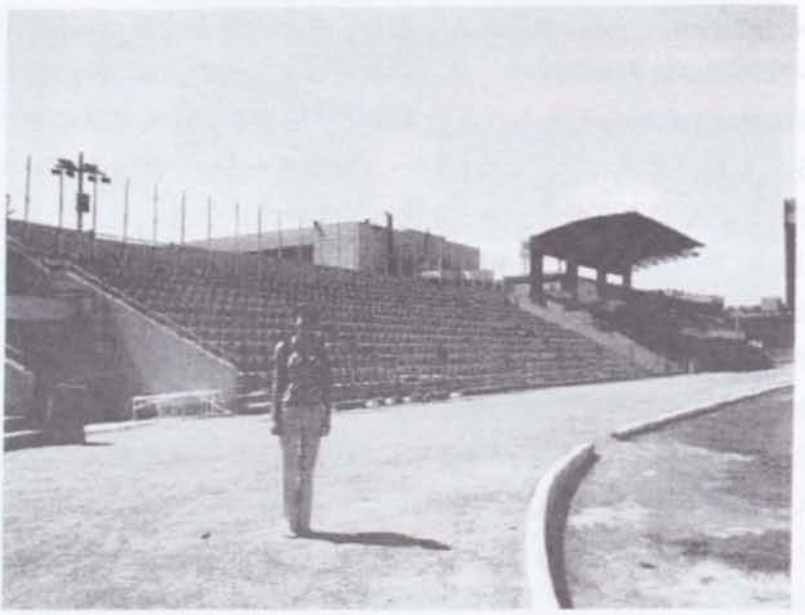
日系人社会の主な行事は，日秘文化会館，ラ・ウニオン運動公園，沖縄県人会のいずれかで行われる。多くの催しは，日系人協会，沖縄県人会，ラ・ウニオンを運営するエスタディオ・ウニオン協会の3団体の協力によって実施されるという。

4．ラ・ウニオン運動公園

ラ・ウニオン運動公園もまた，日秘文化会館と同様に，ペルーにおける日系人の迫害の歴史を背景として誕生した。直接のきっかけは，第二次世界大戦中にリマ日本学校が閉鎖されたため，日系人がスポーツを楽しめる場所がなくなってしまったことである。

戦後の4，5年間は，日系人の組織的な活動は停滞していたが，子どもたちの豊かな将来のためにスポーツ施設を作ろうと考えた1世たちが，太平洋クラブを立ち上げた。それは1952年にラ・ウニオン協会株式会社となり，翌年，10万平方メートルの敷地をリマ市郊外に購入した[viii]。1世の人々は，広大な土地を自分たちでこつこつと整備した。テニスコート，サッカー場，野球場，ホールがひとつずつ完成していった。宿泊施設も作られ，日本からやってきた子どもたちがここに合宿して，ペルーの子どもたちとスポーツで交流した。

ラ・ウニオンでは，子どもだけでなく，大人たちも，さまざまなスポーツを楽しんでいる。とくにサッカーは強豪さで知られるようになり，1987年にはペルーのプロ級サッカーチームに昇格した。



（写真9　ラ・ウニオン運動公園で）

1971 年には，運動公園の一角に，ラ・ウニオン総合学校が設立された（写真 10）。小学校から高校までの全日制の学校で，当初はほとんどすべての生徒が日系人であった。70 年代の末には 1800 人ほどの生徒がいたが，出稼ぎに伴われる子が増え，96 年には 1000 人に落ち込んだ。ペルー人の生徒も積極的に受け入れるようになり，現在の生徒数は約 1600 人で，日系とそれ以外の生徒の比率はほぼ半々であるという。日本語の授業は，小学校では週 4 時間，中学校では週 3 時間ある。日本語の授業数は限られているが，「誠実，尊敬，団体の協調」などの「日本の価値観」を，日本語の学びを通して身につけさせるという理念がある。沖縄の文化については，民謡や太鼓を教えている。出稼ぎに伴われていく子どものための，通信教育のカリキュラムもある。

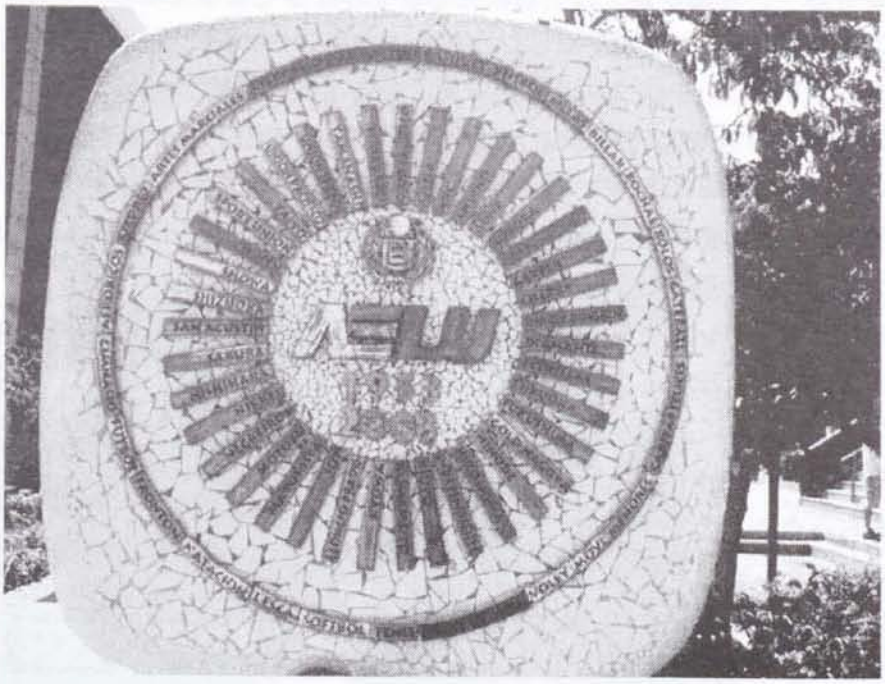
ラ・ウニオン運動公園では，70 年代に青年部と特別活動部，80 年代にはモビエント・デ・メノーレスという青少年の活動グループが設置され，子どもや若者の育成に力を注ぐという理念が，多様な形で開花した（写真 11）。74 年には婦人部ができて，手芸や料理の教室などの施設も整った。1981 年から 84 年までは，ラ・ウニオン新聞が，日系の情報を扱うメディアとして発行された。この新聞は，プレンサ日系という新聞の前身である。

1980 年にはＡＥＬＵＣＯＯＰが設立された。この金融機関は，たのもし（もあい）を業務の一環として取り扱うなど，沖縄系の人々の共同資金づくりに大きく貢献するようになった。1982 年には，ＡＥＬＵ信用協同組合（コペラティーバ）が設立され，日本で出稼ぎをしている人たちによるペルーへの送金のシステムができあがった。

ラ・ウニオン運動公園は，ペルーにおける沖縄系，日系コミュニティの最も重要な拠点のひとつである。それが「運動公園」であり，スポーツが中心になっていることは，

きわめて興味深い。スポーツ施設は，ラ・ウニオンだけでなく，沖縄県人会の施設においても大きな比重を占めている。

（写真 10　ラ・ウニオン校にて）



（写真 11　ラ・ウニオン運動公園にて。さまざまな加盟団体と活動内容が記されている。）

スポーツは，まず，子どもたちの心身を健やかに育むものとして位置づけられている。だからこそ，日系，沖縄系の社会において，スポーツ施設の建設は広範な支持を得たのである。また，スポーツ施設は，子どもだけでなく全ての世代の人々の楽しみの場として，たくさんの人々を集わせる。さらにスポーツは，アイデンティティとも深く関係する。スポーツチームの活動を通じて，沖縄県系として，あるいは郷友会の一員としての帰属意識が人々に根づくのである。

このように，スポーツによって子どもを育て，人々が集い，お互いに結びつくというエスニック・コミュニティの形は，沖縄系，日系の1世たちが，戦後の困窮と荒廃の中で，なんとか次の世代のために役に立つことをしようと知恵を絞り，力を寄せ合った成果である。そこには，スポーツ大国ペルーの文化的な影響も見出せる。それは，余暇を大切にし，スポーツ仲間と汗を流して過ごす楽しい時間に，大きな価値を置く文化である。ひたすら勤労に励んで蓄財し，蓄えた富は送金していたかつての「日本人」たちが，ペルーのライフスタイルや価値観をとりこんで，「日系ペルー人」として人生を楽しみ，凝集力を発揮するようになっていったプロセスがうかがえる。

しかし，そこに大きな打撃を及ぼしているのは，出稼ぎブームであるという。会員数の減少によって，ラ・ウニオンは深刻な財政難に直面するようになった。役員の間では，日系以外の人たちに「ドアを開く」かどうかについて，繰り返し，話し合いがもたれてきた。2006年時点では，まず日系人の中から会員を増やす努力をし，それで足りない部分について，非日系人を受け入れる方針が定まっていた。非日系の人々は，日系人の会員3名の紹介を受けて，面接を経て，会員になることができるようになっている。

Ⅲ．沖縄系の若い世代のアイデンティティと社会関係についてのアンケート調査

1．調査方法

この調査の目的は，リマ市を中心とするペルーの沖縄系の若者たち，とくに3世以降の世代のアイデンティティと関係性について調べることであった。

アンケート用紙は，スペイン語と日本語のものを用意したが，日本語の質問紙はほとんど不要であった。230部を配布し，有効回答181部を回収した。

配布・回収方法は，リマ市にある日秘文化会館で毎週行われている，沖縄系の若者を主な構成員とする文化サークル（琉球三味線，ペルーのダンスなどのサークル）で，その場で回答してもらったり，そこで出会った国吉さんの友達に，別のサークルで配ってもらうために数十部を託したりした。また，ラ・ウニオン運動公園でくつろいでいる人たちに，国吉さんが声をかけて，その場で回答してもらった。日曜日には沖縄県人会で，昼食をとったりスポーツを観戦したりしている人たちに，その場で回答してもらった（写真12）。沖縄県人会で回収したケースが最も多く，約110部であった。さらに，沖縄系の組織・団体の役員やメンバーの方に数十部を託して，その構成員に回答してもら

った。沖縄に戻った後も，国吉さんの親戚・友人たちから，回収したアンケート票が郵送されてきた。

対象者は，当初は，18歳から45歳くらいまでの沖縄系の若い世代の人々，としていたが，サークルや食堂で，その場にいるグループの人々みんなに用紙を配布し，書き込んでもらう方法をとったため，そこに当てはまらない人々もいくらかは回答している。

2．基本属性

181人の回答者のうち，男性と女性はほぼ半々を占めていた（巻末資料ー表1）。

年齢は，20代が最も多く，約41パーセントで，30代が約25パーセント，10代が約18パーセントであった（表2）。世代は，3世が約67%で最も多く，ついで4世，2世が多かった（表3）。

96パーセントの回答者は，リマ出身であった（表4）。そして，ペルー国籍のみを持っている人が回答者の約73パーセントであった。

学歴は，中学校までが最も多く，約35パーセントで，ついで大学までが多かった（表5）。通った学校の種類は，日系の学校が37パーセント，カトリック系の学校が33パーセントであり，どちらも，公立学校の16パーセントを大きく上回っていた（表6）。

職業は，学生が最も多く，29パーセントを占めており，一般従業者は17パーセントであった（図1）。自営業者は回答者の11パーセント，経営者は約7パーセントを占めていた。

1世から2世，3世へと世代が推移するにつれて，自営から一般従業者・専門職へと職業構成の比重が変わってきたことはしばしば指摘されている。この調査は，沖縄県人会とラ・ウニオン運動公園において主に実施したために，回答者に占める自営・経営の比率がやや高くなっているように思われる。これらの施設をよく利用するのは，一般従業員よりも，自分の裁量で時間やお金を使いやすい自営業の人が多いといわれている。

（写真12　アンケートに記入してくれている沖縄系の若者たち）

3．文化とアイデンティティ

沖縄方言（ウチナーグチ）を全く使えないという回答は，83パーセントを占めた（表7）。これを話せる人はわずかに4名，聞き取れる人は22名であった。日本語については，全く使えない人は約19パーセントで，話せる人，聞き取れる人はそれぞれ48人，96人いた（表8）[ix]。

自分の家で主に使っている言語は，回答者の79パーセントがスペイン語，15パーセントが日本語であった（表9）。

沖縄の言葉はほとんど話されていないのに対して，沖縄の文化・芸能を愛好し，実践している人々は少なくない。「現在，どのような文化に関わる活動をしていますか」という質問に対して，沖縄の歌・踊りと答えた人は21パーセントで，日本の歌・踊りの8パーセントを大きく上回った（表10）。沖縄とペルー，両方の歌や踊りをやっている人もいる。

家で主に食べている料理は，ペルーのクリオーリョ料理が54パーセント，日本料理が22パーセント，沖縄料理は15パーセントであった（表11）。言葉を継承することは困難でも，歌・踊りといった文化・芸能，そして日々の食卓にのぼる家庭の味として，沖縄の文化は若い世代に伝えられている。文化や芸能，家庭料理などにおいて，ペルーと沖縄，日本の文化，慣習が入り混じり，共存していることがうかがえる。

仏壇行事は，回答者の7割は参加していると答えている（表12）。一方で，日曜日のキリスト教の礼拝に出席している回答者は，1割に満たない（表13）。

アイデンティティについては，「どこの国の人ですかと聞かれたら，なんと答えますか」という問いに対して，ペルー人という答えが48パーセント，日系人という答えが40パーセント，沖縄人という答えは9パーセントであった（表14）。ペルー人と日系人という複数回答も多かった。

「沖縄と沖縄以外の日系人には，慣習，しきたり，意識などに違いがあると思いますか」という問いに対しては，「違いがあると思う」という回答が71パーセントで，「違いがないと思う」の20パーセントを大きく引き離した（表15）。

「日本人であることを誇りに思うことがありますか」という問いに対しては，「よくある」「ときどきある」という肯定的な回答が89パーセントにのぼった（図2）。逆に，「日本人であることを恥ずかしく思うことがありますか」という問いに対しては，「よく思う」「時々思う」という回答は2パーセントにすぎなかった（図3）。

そして，「これまで日本人だという理由でいやな目にあわされた」経験の有無を尋ねた問いに対して，「ある」は15パーセントで，「ない」82パーセントを大きく下回った（表16）。「これまで日本人でよかったと思ったこと」については，「ある」が76パーセントであった（表17）。

回答者のほとんどは，「日本人であること」がメリットとして受け止められる環境にあり，自分自身も，「日本人であること」に対して肯定的な意識を持っていることがう

かがえる。

「沖縄に対して愛着を感じますか」という問いに対しては，「とても感じる」49パーセント，「ある程度感じる」25パーセントで，愛着を感じている人が多数を占めていた（図5）。

4．日系・県系の施設利用と県人会への参加

「よく利用する施設」を尋ねた質問に対して，日秘文化会館，沖縄県人会とラ・ウニオン運動公園は，ほぼ同数の回答を得た（表18）。それらの施設を利用する目的は，「友達に会う」が最も多く，「スポーツを楽しむ」「同じルーツの人と交流する」という回答がそれに続いた。沖縄や日本の文化に触れる目的でこれらの施設を利用している人々もいる（表19）。

興味深いのは，県人会と郷友会（村人会）への参加である。県人会に参加していると答えた人は54パーセントだが（表20），郷友会は，回答者の96パーセントが参加していると答えた（表21）。どのように参加しているかという問いは，県人会についてしか設定しなかったが，郷友会についても設定すれば，両者の違いがさらに浮かび上がっただろうと思われる。県人会には，「積極的に参加」という回答が22パーセント，「行事に参加」が32パーセント，「あまり参加しない」が22パーセント，「全く参加しない」も22パーセントであった（図6）。

筆者が日曜日に沖縄県人会を訪れたとき，サッカーグラウンドには，郷友会ごとのチームでプレーを競い合う若者たちがいた。彼らは，「ギノザ」などのロゴの入ったチームのユニフォームを着て，自分の所属チームの勝利のために，けんめいにプレーする。ウチナーンチュとしての意識を持てとか，県人会に来いとか言われなくても，スポーツが好きな人たちは，同じくスポーツ好きの友達や充実した施設を求めて，沖縄県人会にやってくる。そして，県人会の施設を使っていても，具体的に彼らが帰属意識を持っているのは，それぞれのチーム名であるところの郷友会なのである。

郷友会は，回答者で最も多かったのは北中城で，わずかな差で沖縄市，宜野座村が続いた（表22）。これらの郷友会への参加は，必ずしも自分の祖父母などの先祖のルーツと結びついているわけではない。祖先が沖縄のどこからやってきたのかを知らない人も，少なくない。ルーツについての伝承は，先祖の誰が，ペルーのどこへ来たのかということは，若い世代にある程度伝わっているが（表23，24），いつごろ来たのかはもうあいまいになっている（表 25）。北中城，沖縄市，宜野座村の郷友会の参加者が多いのは，それらの会には組織力があり，スポーツチームも強豪だからである。それらのチームには，友人・知人の縁で，もともとはその郷友会ではない人や，沖縄系でない人も入っているという[xxi]。

若い世代の沖縄系コミュニティへの帰属とアイデンティティは，ルーツの伝承ではなく，言語でもなく，スポーツや文化・芸能を楽しむ中ではぐくまれているように思われ

る。また，親しい友達と集って楽しい時間をすごすということが，郷友会に参加したり，県人会に行ったりする上での大きな動機づけになっている。そのような，みんなで集まって楽しむことに高い価値を置く慣習や，とくに余暇にはサッカーなどのスポーツに多くの人が興じるというライフスタイルには，ペルーの文化が色濃く投影されている。ここに，世代を経て進んできた文化変容，複数の文化の混交，そして沖縄系コミュニティのペルーへの＜土着化（ローカル化）＞を見て取ることができる。

5．親戚づきあい，その他の関係

筆者は，2003 年に沖縄で暮らす日系人・外国人のインタビュー調査を行ったとき，「沖縄に帰ってきてからの方が，親戚づきあいが減ってさびしい」という声を聞いて，驚いたことがある。それは，いくらかの沖縄県系ペルー人の人たちの声であった。

今回，ペルーで調査をして，改めてペルーにおける親戚づきあいの頻繁さと豊かさを知ることができた。

リマ市内に親戚がいると答えた人は，回答者の 99 パーセントにのぼった（表 26）。市内の親戚とどのようなつきあいをしているかという問いに対しては，日常的にお互いの家を行き来している人が 68 パーセント，行事で集まるくらいだという人は 15 パーセント，葬式や結婚式で集まる程度だという人は 8 パーセントであった（表 27）。もあいをしている人も，9 パーセントいた。親戚とつきあいがないと答えた人は，一人だけであった。

近所で親しいつきあいがあるのも，まずは親戚である（表 28）。ただし，つきあいは親戚や沖縄系の人々に限られず，ペルー人，沖縄系以外の日系人ともつきあいがある。

若い世代の人々は，子どもの頃から，ペルー人と一緒に遊んできた体験を持っている（表 29）。ただし，何もかもペルー人と一緒がいいかというとそうではなく，子どもの学校について回答した人の中で，公立学校に通わせている人はわずかに一人だった（表 30）。多くの人は，カトリック系の私立学校に子どもを通わせている。子どもの通学について回答した人が少ないので，統計的に導き出された知見を述べることはできないが，日本語や日本の習慣を教えてくれることよりも，教育方針や進学率をより考慮して，日系の学校に限定せず，私立学校を選ぶ親がいることがうかがえる（表 31）。

6．沖縄・日本体験と，今後，暮らしたい場所

回答者の 3 割は，沖縄に行ったことがあると答えた（表 32）。滞在期間は，3 ヶ月未満の人が 21 パーセントだが，それ以上の人も 15 パーセントにのぼる（表 33）。

沖縄に行った理由は，「親戚がいたから」「観光のため」が最も多く，24 パーセントであった（図 7）。次いで，「留学・研修のため」が約 20 パーセントであった。「トートーメーの継承」という理由も，わずかだが，あった。

沖縄以外の都道府県にいったことがある人は，さらに多く，回答者のほぼ半数にのぼ

った（表 34）。日本本土に行った理由は，「出稼ぎ」23 パーセント，それに「観光」「家族がいたから」が続いた（図 8）。

沖縄や日本に行った感想として，複数回答可で尋ねてみると，「自分の中の沖縄文化またはルーツを意識するようになった」が 29 パーセント，「日本人に親しみを感じた」が 14 パーセント[xii]，「日本や沖縄の文化に親しみを感じた」が 21 パーセント，「自分の中のペルー文化を意識するようになった」が 10 パーセント，「日本人・沖縄人とペルーの日系人との意識や価値観に違いを感じた」は 24 パーセントであった（表 35）。

日本に家族や親戚がいる人は，回答者の 92 パーセントであった（表 36）。彼らとのつきあいは，「会いに行き来する」19 パーセント，「自分が日本や沖縄に行くとき，助けてくれた」24 パーセント，「電話や手紙のやり取りをする」43 パーセント，「ほとんどつきあいがない」21 パーセントであった（図 9）。

多くの回答者は，日本や沖縄で出会った人々や文化と，重なりと親しみ，違いと疎遠さの両方を感じている。ペルーを離れて日本や沖縄に行くことは，日系人としての自分自身や，ペルーの沖縄系，日系文化の独自性を相対化する機会になっていると思われる。

彼らが将来住みたい場所は，「リマに永住」が 50 パーセント，「沖縄に永住」は 11 パーセントで，「日本に永住」3 パーセントは，「アメリカ本土に移住」5 パーセントよりも低かった（表 37）。そんなことを「考えたことがない」という人々も含めて，ほとんどの人は，リマに住み続けていくと考えられる。日本本土は，出稼ぎのため，あるいは家族がいるから一度くらい，観光ついでに行ってみる場所ではあっても，永住の選択肢にはほとんど入っていない。沖縄は，仕事の機会が少ないにもかかわらず，より多くの人をひきつけている。

沖縄では，5 年に一度，海外在住の沖縄県系の人々が集まって交流し，アイデンティティを確かめあう祭典，「世界のウチナーンチュ大会」が開催されている。これに参加したことのある人は，回答者の約 1 割にのぼった（表 38）。

Ⅳ．ワークショップ「沖縄系の若い世代のアイデンティティ」

1．　第 1 回ワークショップ：「日系ペルー人であることについて」

（1）ワークショップの構成

このワークショップは，1 回目は 2 月 16 日（木）の夜 8 時から日秘文化会館で，2 回目は 19 日（日）の 11 時から沖縄県人会館で，それぞれ 2 時間にわたって行われた（写真 13）。進行は，アントニオ譜久原さんがつとめてくれた。

このワークショップについては，プレンサ日系で広告したり，日秘文化会館のロビーにポスターを貼ったりして広報し，日秘文化会館でサークル活動に参加している国吉さんや譜久原さんの知人・友人も誘ってもらった。

1 回目は，私を含めて 16 人が参加した。10 代から 20 代の若者が多く，そのうち 4

人はジュニア・スタディーツアーで沖縄を訪れた経験があり，3人が県費などによる研修を沖縄で体験していた。Gさん，Iさんは50代で，沖縄系の組織で中心的な役割を果たしており，若者の意識に関心をもって参加した。

とくに1回目の参加者たちは，日秘文化会館に日常的に出入りして催しやサークル活動に積極的に打ち込んでいるような，若者の中でも沖縄への愛着が深い，次世代の沖縄系コミュニティのリーダーとその候補たちが多かった。語られた内容も，自分の中でウチナー・アイデンティティが確立した経緯や，今後の日系，沖縄系の役割についての，よくまとまった立派な語りが多い。その中にも，日系としてどのようにまなざされてきたのか，文化や価値観の融合をどのように自分の中で位置づけているのか，興味深いさまざまな語りが展開された。

「沖縄に研修に行き，ウチナー・アイデンティティに目覚めた」という語りが複数の参加者に共有されていて，ある意味で「モデル・ストーリー」となっている感があり，興味深い。一方で，参加者の中でただひとり，出稼ぎで日本へ行き，「ガイジン」と呼ばれて自己像の大きな破綻を体験したMさんの語りは，深い次元で自分をとらえなおし，複数の価値観の融合を位置づけた声として，耳を傾けさせる力を持っている。

（2）自己紹介

Aさん（男性）：私は3世で，沖縄系であり，同時にペルー人です。沖縄県人会の活動に参加する中で，沖縄文化に愛着を感じるようになりました。最初はスポーツでした。祖父母は沖縄出身でしたが，小さいころは自分のアイデンティティについて考えたことがなく，ただペルー人だと思っていました。祖父の話を聞いて，沖縄のことを考えるようになりました。仏壇関係の行事に興味があって，将来は沖縄に住みたい。

（写真13　日秘文化会館で，1回目のワークショップ）

Ｂさん（男性）：父親は山口，母親は沖縄にルーツがあります。小さいころは，沖縄を意識していなかったけど，ジュニア・スタディーツアーに参加して，初めて沖縄に触れて，興味がわいて，県人会活動に参加するようになりました。でも日本には住みたくないです（笑）。

Ｃさん（男性）：ペルー生まれの「ウチナーンチュ」です。家庭には沖縄の文化があって，小さいときから郷友会に行っていました。でも，すごく変わったのは，沖縄に行ってからでした。1990 年に，両親が，祖父に会いに連れて行ってくれた。その後，研修も受けて，三味線を習いました。帰ってきてから，沖縄系の行事，全てに参加するようになりました。

Ｄさん（男性）：小さいころから，日本文化は身近でした。

Ｅさん（女性）：私も，小さいころから日本文化に親しんできました。大学で日系の人と出会って，自分のアイデンティティについて考えるようになり，それからこういう活動に参加するようになりました。

Ｆさん（男性）：父が沖縄系で，家には仏壇もあり，沖縄の文化が大事にされています。子どものころからラ・ウニオン公園に通って，「こどもの日」などの文化や価値観を学んできました。

Ｇさん（男性）：3 世で，自分のことを日系ペルー人だと思っています。自分のルーツをちゃんと知っていること，日系人であることも，ペルー人であることも，誇りに思っています。

Ｈさん（女性）：3 世で，西原町にルーツがあります。ラ・ヴィクトリア校（注：日系の学校）に通い，家族と郷友会活動に参加してきました。大学に入って，そういう活動とは疎遠になりました。大学では，周りは日系の人ばかりで，自分も「日系人」として見られるようになって，それなのに実際の活動からは離れていて，何か足りない気がして，エイサーのサークルに入りました。これだったんだなぁと思いました。県費で沖縄研修に行ったとき，眠っていた部分が覚めるように，沖縄アイデンティティが高まった。

Ｉさん（男性）：父親は 1 世，母親は帰来 2 世で，自分は戦後の 2 世になります。小学校では，ペルー社会からの拒絶を感じました。1940 年代の日系人に対する迫害についても，親から聞きました。日系人は，皆で力を合わせて，底辺から盛り返したんです。2 世と帰来 2 世の反目もありました。日本語ができる，できないで対立したんです。子どもの頃，両親と一緒にラ・ウニオンに来ました。あの頃は，道がまだ泥まみれだった。

Ｊさん（女性）：3 世です。家族ぐるみで，郷友会，県人会の活動に参加し，日系人の友達もたくさんいました。沖縄で研修を受けるなど，何度か行ったことがあります。行くたびに，ウチナー・アイデンティティが固まってくるのを感じます。同時に，研修のときは，ペルーの文化を紹介しなければならかったので，それを通して，ペルーの文

化についても深く知ることができるようになりました。

Kさん（女性）：3 世で，家では父親が三味線を弾くこともありました。両親は，郷友会で知り合ったんです。13 歳のとき，親に連れられて，祖母に会いに沖縄に行き，3ヶ月，滞在しました。それから，祖母がどういう経緯でペルーに来て，また戻ったのかを知りました。ペルーに帰ったとき，口からスペイン語が出てこなくて困りました。忘れないように，日秘文化会館で勉強して，研修にも行きました。その中で，だんだん，自分にとっての沖縄が大きくなってきました。

（3）どんな時に自分のことを日系だと，あるいはペルー人だと感じるか

Aさん：僕のお弁当には巻き寿司とか「トーフ・フライ」が入っていたし，スペイン語の中に日本の言葉が混ざったりしました。スポーツはラ・ウニオンでやって，時々，ペルー人のチームと対戦した。僕にとって日本人であることは，ラ・ウニオン代表の自分のチームに所属していることだった。

Bさん：まわりにチャイナと呼ばれたとき。そういう，「外」で感じる。家ではいつも，みんな沖縄だし。

Cさん：価値観かなぁ。自分と，自分の友人のペルー人とは違うなと思うことがある。ちょっと誠実さがたりないなと思ったり。でも，外国を旅行しているときは，ペルー人としての誇りを感じる。

Lさん（男性）：自分の中に，祖先の文化があるなあと思うときは，日系人を誇りに感じる。オリンピックは，ペルーが参加してないときは日本を応援する。どっちも応援する。

Dさん：日本に行ったことはないけど，ペルー人よりは日系だと自分のことを思っている。でも僕も，海外に行くと，ペルーのことも誇りに感じられる。

Eさん：日本人がペルーで果たしている役割のことを耳にすると，誇らしい。この文化会館もそうだし。日本人の決断力とか，助け合いの力は，信頼できる。

Fさん：日本人の祖父は，「働き者」「正直者」であることを誇りにしていた。僕は，同時にペルー人であることも誇りに感じる。何かを自分が決めてやり遂げたりするとき，僕の中で，その二つはそんなに違ったものではなくて，混ざって一つのものになっている。

Gさん：同感だ。沖縄の祖先を，みなと共有しているのがうれしい。沖縄ではない人から，自分の祖先の偉大さについて聞くと，すばらしいと思う。ラ・ウニオンには，日系人ではない人もいて，そういう人は，日系人がこういう形に残る施設を作って，ずっと役に立っていることを，本当に感心している。海外で旅行をしているとき，ペルーのマチュピチュのことなどを話していると，ペルー人としての誇らしさがわいてくる。自分は両方持っていて，カトリックも入っているし，融合して，より豊かになっている気がする。

Ｈさん：大学に入って，初めて，日系人って特別だと思った。日系人は固まっている。で，先生にほめられるのは日系人（笑）。

Ｉさん：若いみんなの話を聞いていると，考えさせられる。小学校時代は母親に繰り返し戦争の話を聞いていたし，ペルーの歴史よりも日本史の方が詳しかった。その頃は，自分の子どもがペルー人と結婚したせいで自殺する日系人もいた。ペルー人と結婚するのは罪だと思った。中学校で公立学校に進み，そういう考え方が消え去った。ペルー社会からよくしてもらって，助けてもらった。

Ｊさん：やはり外社会と接するとき，チナと言われるときに，日系人であることを感じる。自分がペルー人として相手に接することもある。

Ｋさん：私もＨと同じで，大学で初めて日系人だなぁと感じた。大学の先生は，日系の学生はまじめだと信じ込んでいて，ちょっと気恥ずかしいこともあった。あと，自分のルーツについて調べて書いてくる課題が出て，自分のルーツを発見している人は，その課題がやりやすかった。

Ｍさん（男性）：ものすごく広い質問で，どこから答えたらいいのかな。小さいときは，長男で，仏壇を継ぐことになっていて，日本語が話せなくても，日系人として育てられた。親は食堂を経営していて，客とけんかになると，「あいつは土人だから」と言っていた。自分が「チーノ，チーノ」と呼ばれて，最初は嫌で，なんで中国人になるのって思っていた。慣れて，聞き流すようになった。ラ・ウニオン校で，同じルーツの人と接して，アイデンティティが芽生えてきた。この中では，信頼関係が作れる。それからは，時にはペルー人，時には日系人として生きた。出稼ぎで日本に行って，「ガイジン」と呼ばれたときは，ショックで，アイデンティティが混乱した。何度考えても，人格がひとつにまとめられずに，時と場合で移り変わる。ゴーヤーチャンプルーみたいな，自分はチャンプルー。2 世の苦労話は嫌いだったけど，自分の家庭の中に，ものすごい体験をした人がいたんだということを知ったときには，誇りに変わった。

（4）お互いの意見を聞いて思ったこと

Ａさん：ペルー文化と日本文化が，私たちをつないでいるんだと思う。私たちの祖先は，全くの異国で，ものすごくがんばってここまで来た。融合は，そのたまものだと思う。ここはペルーだけど，ペルー人はこの社会で，日系人ほどの信頼を得ていない。これからは，自分たちと違う歴史を持つ人たちとも，絆を深めたい。それがこの国のためにもなると思う。

Ｋさん：こんな風に，自分と同じ若い人の意見を聞いて，初めていろんな意見があるのを知った。

Ｎさん（男性）：自分のことを，とてもラッキーだと感じる。どこ出身か聞かれたらペルー生まれだと言うし，ルーツを聞かれたら沖縄と答える。僕も，これまでの中で日系であることが重荷だったこともあるし，苦労もあった。でも，今は，ルーツや価値観

を次の世代に伝えることが自分たちの責任だと思っている。このワークショップはとてもいい機会になったし，先輩のGさん，Iさんにこの話を聞いてもらえて，お二人の話も聞けてよかった。みんなで助け合う文化をペルー社会に広めていけたらいい。

2．第2回ワークショップ：日系と沖縄系の違い，日本人と日系の違い

（1）ワークショップの構成

2回目は，私を含めて13人が参加した。1回目と重なる参加者は，そのうち5名である。初めて参加した人たちの中に，親の出稼ぎに伴われて日本へ行き，日本で育ち，今は夏休みでペルーに戻っているというOさん，その妹で，1年間，ペルーにスペイン語を学びに戻ってきているというQさん，その友人のPさんがいた。彼らは，沖縄県人会館に遊びに来ていて，そこで流れてきた案内の放送を聞いて，興味を持って会場にやってきた。また，Rさんは少年時代，サッカーの選手として日本に滞在していた。この4人が参加してくれたために，2回目のワークショップでは，日本への定住体験にもとづく語りが豊かに展開された。沖縄系の若者たちが，ペルー人，日本人，日系人とのつきあいで，それぞれにコミュニケーションの手法を縦横に使い分けていることや，日本に住んでいる日系の若者にとっての沖縄県人会の役割などが活発に議論された（写真14）。

沖縄系の組織で中心的な役割を果たしている人の中からは，今回はSさんが参加した。1回目のワークショップにおけるGさんやIさんと同じように，Sさんは真摯に若者たちの声に耳を傾け，自分の体験や考えも話してくれた。

（写真14　沖縄県人会館で，2回目のワークショップ）

（2）日系と沖縄系はどこが違う？

Ｏさん（女性）：私は沖縄市にルーツがある日系人で，4 世です。10 歳で親の出稼ぎで日本に行って，ずっと関東に住んでいるから，ペルーの日系と沖縄系の違いはわからない。ペルーにいたから，自分のルーツが沖縄だとわかっていた。

Ｐさん（男性）：自分も 4 世です。少し違いがあって，沖縄は島で，みんなが知り合いで，本土よりも団結していて，行事も活発で，みんなが参加する，まとまりのある社会だと思う。沖縄の人は明るい。言葉も違う。人懐こくて，知らない人にもフレンドリーだ。2 回，観光で沖縄に行ったことがある。

Ｑさん（女性）：アイデンティティはそんなに関係ない。外見は，（ナイチの人は）ちょっと眼がつりあがってるかな。沖縄でも他でも，そんなに違わない。

Ｏさん：日本の日本人と沖縄の人は全然，違う。日系人は，どこでもいっしょ。

Ｑ：沖縄の人の方がフレンドリーだと思う。でも本土の日系人社会では，沖縄系と日系の区別はないんだよね。

Ｒさん（男性）：自分は 3 世で，母方の祖父のルーツは西原町にある。実のところ，日系と沖縄系の人の違いは感じない。同じだと思うが，何かのときに，「自分は沖縄」と言ったりする。小 5 のときに，サッカーをしに沖縄に行った。サッカーしかやってないから，あまり意見を言えない。母方のおばあちゃんの親戚がいると思うけど，詳しい居場所はわからない。

Ｓさん（男性）：このワークショップの企画はとてもいいと思う。こういうのを普段からやったらいいと感じた。100 周年の記念祭のときにもやったらよかった。自分たちの世代は，若者がなにを考えているのか，今後，役割が次の世代へ引き継がれていくのか，心配な時があって，こんなことをやっても参加者がいるだろうかと思ってやってこなかった。今後，継続していきたい。自分は，沖縄系の組織の役員として，沖縄に何回か行った。違いを感じるには，一般の人として行ったほうがよかったかもしれない。東京にも，役職についていて，その仕事で出かけた。そのことについては，よくしてもらった。ただ，知人が，東京と沖縄のタクシーの運転手は，人懐こさが全然違うと言っていた。沖縄の人は，おおらかで，すぐにわいわいと仲良くしゃべりだす。自分はペルーでは，ラ・ウニオンのクラブでスポーツをしていて，そういう集まりには東京の人とかもいて，出身地で違いを感じることはない。

Ｔさん（女性）：私は名護にルーツがある。Ｓさんの言うとおりだと思う。沖縄にルーツがある人とそうでない人は，おおらかさとか，温かさが違うかもしれない。私は日本に住んだことがあり，短期間だが，沖縄にもいて，サトウキビ畑とか，キモノみたいな装束の女性たちを覚えている。田舎だったからかもしれないけど。

（3）ペルー社会は日系社会をどう見ているか，日本では日本人とどうつきあうか

Oさん：ペルーにはこの１ヶ月しかいないから（また日本に戻るから），現地の人とあんまり接したことがないから，なんともいえない。関東にいるときは，日本人といるときは，日本人と共通する話題で話して，ふるまいも彼らに合わせている。日系人どうしで，家族や親戚といるときは，もっと明るくなって，ペルーらしさを発揮している気がする。日本人には気を使うよ。日本人もこっちに気を使うし。ペルー人といると，ありのままでいられる。

Qさん：じゃあ，日系ペルー人といるときは，ユーモアのセンスはどっちを使う？日本？ペルー？

Oさん：誰と話しているのかによって変わってくる。家族とはスペイン語だから，そっちのノリになるし，日系人で日本語を話す人だと，混ざる。

Pさん：ペルーの現地の人とは，よくわからない。日本人とは…。

Oさん：彼は日本で，日本人といっしょにいることが多いの。仕事場が遠いから，ほとんど日本人と過ごしてる。だから，ペルーに戻ってきたら，ペルーのユーモアのツボを彼に説明しないといけない。

Pさん：日本で勉強したから，家庭でしかスペイン語って話してない。18 歳からはずっと日本で一人暮らしをしていて，そうなると完全に日本語だけ。向こうの日系ペルー人と接する機会がほとんどなかった。でも，家ではスペイン語を強制される（笑）。

Qさん：ペルーで，ペルー人の友達といるとき，沖縄の行事があるよっていったら，あっそう，楽しんできてね，とだけ言われる。チナたちと集まりがあるんだね，って。招待していいのかどうか，とまどう。ああいう返事を聞くと，招待しないほうがいいのかなって思う。

Tさん：日本では，やっぱり違ってた。日本人には，気を使ってお互いに接する。日系ペルー人は，お互いに冗談を言い合う。信頼しているから。

Oさん：日本人は，一人がなにかやると，みんな，やるよね，自分がない。

Qさん：そうだと思う。一人で個性を発揮しない。私が見た日本人は，服とか髪型ではみんなとの違いをアピールしてるように見えたけど。

Uさん：なんでだと思う？

Oさん：日本人に意見を言うのって怖い。

Pさん：しゃべる前に考えないとね。日系ペルー人にはどう言ってもいいけど，日本人は，その場では黙ってて，後で他の人に言うから。

Rさん：日本にいたときは，ずっと彼らに合わせて生活してた。サッカーやってたから，ずっと団体行動で，両親とも離れて。最初，日本人といっしょにいるのに疲れていた。同じペルー日系人とも会ったけど，深く話す機会はなかったし。

Hさん：たしかに，私たちの日系社会は閉鎖的だって，周りの友人から言われたことがある。中国系の子からも言われた。日系人は，日系人とばかりいっしょに過ごしてい

るね，って。親しいペルー人の友人には，自分がやっている沖縄系の文化についての活動のことを話すし，わかってくれる。

Ｓさん：日系と非日系の習慣は違う。日系人で集まると，ＡＥＬＵとか，日系人しかわからない単語を使って話す。例えば，こういう活動の場に，非日系の人を招待するのは難しいかもしれない。現地の人とは大きな違いがある。難しいこともある。

Ｔさん：私は，日系人といっしょにいるときと，ペルー人といっしょにいるときでは，ふるまいが違う。文化が違うから，仕方がないと思う。同じようにふるまおうとしたけど，できなかった。日系人とはキャッチボールができるけど，ペルー人とはできない。私は，ペルー人と日系人両方がいる場所では，状況に応じて使い分ける。人にもよる。ペルー人の中にも，日系人の背景を知っている人がいるから。知らない人に，同じようにふるまうのは難しい。それと，お互いをどれだけ知り合っているかによる。

（4）うちなーぐちを話せるか？

Ｓさん：（ぱっと出てくる単語は）めんそーれとか，ソーキ（笑）。

Ｐさん：（自分が住んでいた）大阪の方言は使えるけど，沖縄のはそうではない。必要ない。

Ｈさん：おばぁが自分を叱る言葉ばっかり（笑）。やなわらばー！とか。

Ｔさん：単語は出てくるけど，日本語と沖縄の言葉の区別がつかない。「マクラ」「オカネ」「タダイマ」…。

Ｐさん：ケチュア語とスペイン語みたいなもので，（沖縄の言葉は）通じないし，必要性がない。

Ｏさん：でも，文化を伝えるのは大事じゃない?

Ｐさん：沖縄でも若い人は使ってないんじゃないの。

Ｈさん：日本に行く前は，沖縄でも使えないと思ってて，年寄りだけだと思ってたけど，30 代でも，使ってる人は使ってるよ。私が意味わかるのはちょっとだけど。もっと知りたい。でも，ひとつの言葉として，それだけでしゃべるのは難しい。沖縄にいるおじいさん，おばあさんは，うちなーぐちしか話さないから，意味がわからなかった。

Ｓさん：文化としては学ぶべきだと思う。うちの家では，義理の兄が，祖母とうちなーぐちで話している。混ざってもいいから，話したらいい。

Ｊさん：婦人会が，沖縄の言葉の教室を，不定期に開いている。これから浸透させていきたい。自分が沖縄に行ったとき，少しでも使うと，相手の人が心をひらいてくれるのを感じたから。

Ｔさん：文化としては残すべきだと思うけど，すごく労力がいる。

（5）出稼ぎでペルーを離れた若者たちと県人会

Ｎさん：ＯとＱとＰは，もしペルーに定住することになったら，沖縄県人会に入る？

県人会は必要だと思う？

Oさん：県人会は必要だと思う。文化を引き継ぐ場だから。自分も入りたい。

Pさん：自分も必要だと思う。集まる場所があることは大事。お互いに知り合える。

Qさん：大事だとは思うけど，いざ参加するとなると，自分のことも忙しいし，やらないかも。自分たちが何かを作るのは難しいけど，イベントがあったら行くかな。この1年間は，勉強しに（ペルーに）来たから，早くスペイン語をマスターして日本に帰りたい。遊びにも行きたいし，自分にとって大事なものを選んでしまう。仕事しながら県人会で活動している人もいるけど，忙しすぎ。

Hさん：新聞を読んだり，向こうの親戚の話を聞いたりすると，向こうの日系人はバーベキューしたり，日系ペルー人で集まって楽しんでいて，日本文化にあまり接していないみたい。向こうにいるのに，日本語がわからない。彼らがここに戻ってきても，行く前とあんまり変わらない生活をしている気がする。同じような感じで県人会に来たり。

Jさん：県人会は，日本から帰ってくる人を受け入れる体制になっているかな？市町村の郷友会で出来上がっている。もしその人がスポーツを好きなら，ここに来てプレーできるけど。

Sさん：帰ってきた人に，沖縄県人会は必要かな？今の県人会は，文化継承と，スポーツ活動が大きな比重を占めていて，それも，スポーツをやる人のほうが多い。その活動内容を見る必要がある。スポーツをしている人の中で，非沖縄系の人が増えている。県人会活動の役割と，スポーツ活動の役割を，分けて考える必要が出てきた。出稼ぎから帰ってきた人には，今の状態なら，多分，県人会よりも日秘文化会館がいいんじゃないか。沖縄県人会としては，出稼ぎから戻った人に何ができるか，考えないと。

Tさん：出稼ぎ帰りの家族が県人会にいたら，他の出稼ぎ帰りの人たちも来ると思う。そしたら，県人会の役割は，出会いとか，つながりということになる。出稼ぎから帰った人も，日本文化が好きだったら，こっちの活動にも溶け込めるかも。

Hさん：出稼ぎで行った人の子どもは，向こうでは日本文化にたくさん触れてきた。親は，せっかくの日本文化を失わせたくないと思うかも。

Nさん：こういう話をしていると，個人的な話だけれど，沖縄のルーツとかアイデンティティとか，お互いに共有することがたくさんある。こういうふうに知り合ったり，共有したりすることで，もっと自信を持って，（県人会の）外でも活躍できるんじゃないだろうか。本当にペルーで生まれ育って，自分は得だなあと思う。

V．考察

1．スポーツによる沖縄文化とペルー文化の融合

今回のペルー調査で，一貫して強く印象に残ったのは，スポーツが，ペルーの沖縄県系の組織において占めている卓越した重要性であった。サッカー，ゲートボールなどの

スポーツは，さまざまな世代の人々を沖縄県人会やラ・ウニオン運動公園に集わせる。人々はそこで友人を作り，郷友会への帰属意識を育み，それが沖縄系のアイデンティティに結びついている。

人々は，スポーツを通じて，仲間といっしょに楽しみながら，ウチナーンチュとしてのアイデンティティの継承や獲得をするのであるが，それは同時に，ペルー文化の豊かな発露ともなっている。ペルーでは，余暇こそが仕事以上の価値を持っており，さらに余暇においては，消費行動よりも友人と集まって自分の体を動かして楽しむことも高い価値が置かれている。ダンスなど，体を動かす楽しみは他にもあるが，スポーツはその中で最もポピュラーな楽しみである。そしてペルーには，年齢や性別，スポーツの技能のレベルに関わらず，さまざまな人がスポーツをする文化がある。このユニークな文化を通じて，ペルーの人々は，日本にはない生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）を享受している。それは，仕事以外の場所にもたくさんいる友人との親密なひとときであり，自分の身体を通して実感する，充実感や達成感である。それに比べて，日本人の余暇には，高価な商品やサービスが彩りを添えているが，関係性と身体性という具体的な次元においては，ペルーの余暇のほうが圧倒的に豊かな面をもっている。

ペルーにおける沖縄系の人々が，スポーツによって集い，アイデンティティを継承している様子には，ペルーと沖縄の文化の融合，そして，沖縄系のコミュニティの，ペルーにおける＜土着化（ローカル化）＞が見出せる。きわめてペルー的な方法で，沖縄らしさが維持されているのである。だからこそ，たくさんの人が自然な形でひきよせられ，参加し，コミュニティが継続していっているように思われる。

（写真 15　沖縄県人会でサッカーを楽しむ人々）

一方で，スポーツに牽引される組織活動というものの問題点も，とくに団体・組織の運営を担う人々にとって意識され，対策が模索されている。そこでは，スポーツから外に広がらない関心，スポーツ重視の中で増えていく非沖縄系のメンバーのことが，危惧として語られていた。

1．　沖縄系であるということと＜複数の自己＞

ペルーの沖縄県系社会は，世代が推移し，自営業を営む人が減って勤労者が増えていく中で，またデカセギでペルーを離れる人が続出する中で，メンバーの減少という問題に直面してきた。同時に，国際結婚，複数のエスニックな背景を持つ人々の増加，デカセギ帰りの人々の出現といった，沖縄系の組織化が始まった時代には全く想像もされていなかった状況がすすみ，沖縄系の人々の内なる多様化が進行している。

今回の調査で興味深かったのは，アンケートでもワークショップでも，若い世代の人々が，自分自身が沖縄系であることをきわめて積極的に位置づけていたことである。同時に，「ペルー人であることを誇りに思う」，「自分の中に沖縄とペルーが溶け込んで豊かになっている」といった声を聞くことができた。人々は，自分の中の文化の融合を，肯定的にとらえている。

沖縄での研修の経験は，そのようなアイデンティティを育むにいたるプロセスとして，非常に大きな意味を持っている。沖縄系の若者たちは，沖縄で，沖縄の文化について学ぶだけなく，ペルーの文化を伝える役割も担うことになる。それを通して，彼らは自分にとってのペルーの文化について，考えを深めていく。研修の経験は，沖縄系ペルー人としての自分自身を相対化してとらえるにいたる，通過儀礼となっている。さらに，研修を終えた若者たちは，ペルーに戻り，沖縄系のネットワーク化を担うリーダーとなっている。沖縄県と市町村は，海外で暮らす沖縄系の若者にとっての研修の意義の，はかりしれない大きさを認識し，この貴重な貢献を継続する必要があると思われる。

一方，日本でのデカセギを体験した人々は，さまざまな葛藤や，アイデンティティの混乱を経てきている。しかし，＜複数の自己＞の戦略的な使い分けや，葛藤を含めた自分自身への誇りなど，深い次元での自己のとらえなおしにつながっているケースもあることがわかった。

このような，複数の文化，価値観，人間関係，そして国々の間を，ときに苦しみ悩みながらも縦横に行き来し，＜複数の自己＞を育む人々は，ディアスポラ－離散し拡散し，国境を越えて生きる人々－と呼ばれることがある。沖縄系ディアスポラの人々の存在を，ペルーの沖縄系社会が，そして沖縄県にある沖縄社会が，どのように豊かに位置づけていくことができるのかが，問われているのではないだろうか。

謝辞：アンケート調査に回答してくれた皆さん，ワークショップ参加者の皆さん，快く私の訪問を受け入れて下さったペルー沖縄県人会，沖縄婦人会，沖縄市郷友会，ペル

一日系協会，プレンサ日系，ペルー新報，ラ・ウニオン校，ヒデオ・ノグチ学校，AELUCOOP，エスタディオ・ラ・ウニオン協会の皆さん，リサーチ・アシスタントの譜久原（旧姓国吉）サオリさん，調査にご協力いただいたアントニオ譜久原さん，パトリシア譜久原さんに，心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

---

i 沖縄県観光商工部交流推進課『国際交流関連概要』2006 年参照。

ii フクモト・マリ『新しい太陽に向かって』561 ページ参照。

iii ガルシア大統領の金融政策の失敗が，日系人の小売業に壊滅的な打撃を与えた。「ガルシア時代（とその後）は，日系人の半分は出稼ぎに行った」と，ある沖縄系の 2 世の人が語ってくれた。また，デパートなどの大規模商業施設の建設と，コリア系のスーパーマーケットの台頭も，日系の小売業にダメージを及ぼしたといわれている。

iv これについては，日系，沖縄系の社会の中に，「混血」に対する偏見があり，それを避けるために，ペルー人と結婚した女性たちは日系社会から遠ざかってしまうという意見を，ある沖縄系の集いで耳にした。メスチーソ（ペルー人との混血）への差別や偏見については，フクモト・マリの著作でも言及されている（p．564）。

v ある県人会のメンバーは，「沖縄に研修に行った子は，ウチナーンチュになって帰ってくる」と語ってくれた。

vi『ペルー沖縄市郷友会 20 年の歩みと証言　記念誌』1999 年参照。スペイン語表題は Fonde Editorial OKP,1999.

vii 戦前のペルーにおける日系人社会では，小売商としてこつこつと富を蓄積した人々は，故郷に送金するか，日系人の組織に献金するかして，日系人社会の内部に還元し，あるいは日系人の中で富を誇示する傾向が大きく，ペルーの地域社会に貢献しようという意識は低かった。「日秘会館とラ・ウニオン運動公園は，ペルー社会において日系社会が好意的な評価を得るかどうかという，試金石の役割をおっている」（『ペルー国における日系人社会　1966 年調査』）。ペルー社会への貢献という点では，2005 年にリマ市内に設立された移民百周年記念病院も，日系以外のすべての人々に開かれており，高度な医療を提供する施設として地域社会から高い評価を得ている。

viii ナンシー坂田チャン『ウニオン運動場 40 年の歩み』1995 年。

ix 沖縄系のさまざまな団体・組織の役員の方と面談する中で，「南米でペルーが一番，日本語話者が減っているのではないか」という話をしばしば耳にした。第二次世界大戦と，その後の強制収容の爪あとは，ペルーにおける言語・文化の継承に深い影を落としている。2 世よりも 3 世の方が，出稼ぎを目指して熱心に日本語を学ぶので，日本語話者が多いという。

x

xi ちなみに，これらの郷友会ごとのチームが競い合うスポーツ大会も，2006 年からは沖縄系だけでなく，日系人の総合スポーツ大会ということにして，他県の人も入ってもらうようにしたという。

xii 日系の人々が日本で感じるのは，親しみだけではない。「彼らはペルーの日系社会で伝えられてきた，勤勉で親切な，誠実な日本人という神話と，現実とがぶつかるのを感じる。『日本人は私たちを差別する。日本人として認めない。ペルーでも私たちはペルー人としては認められない。なんて悲しいんだろう，日本人でもなく，ペルー人でもないなんて。日本人はお互いに助け合うが，外国人を白い眼で見るし，私たちの習慣のことを悪く言う。』」（フクモト・マリ，前掲書，561 ページ）。

<参考・引用文献>
国際協力事業団『ペルー国日系人実態調査報告書』1992 年
Mary Fukumoto, Hacia un Nuevo sol, Asosiation Peruano Japonesa del Peru,1997.邦題『新しい太陽を求めて』
ナンシー坂田チャン『ウニオン運動場 40 年の歩み』1995 年
日本人ペルー移住 80 周年祝典委員会『アンデスへの架け橋－日本人ペルー移住 80 周年記念誌』
ペルー沖縄市郷友会『ペルー沖縄市郷友会 20 年の歩みと証言　記念誌』1999 年
柳田利夫『ペルー日系人の 20 世紀』芙蓉書房出版，1999 年
琉球大学地理学研究室『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅲ）－アルゼンチン・ペルー－』1990 年
在ペルー日系人社会実態調査委員会『ペルー国における日系人社会』1969 年

<資料　沖縄の若い世代のアイデンティティと社会関係についてのアンケート調査>

表1　回答者の男女比

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
男	86	48	48	48
女	91	50	50	98
不明，無記入	4	2	2	100
合計	181	100.0	100.0	

表2　回答者の年齢

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
10代	32	18	18	18
20代	74	41	41	59
30代	45	25	25	83
40代	16	9	9	92
50代	6	3	3	96
60代	2	1	1	97
不明，無記入	6	3	3	100
合計	181	100.0	100.0	

表3　回答者の世代（沖縄移民の何世にあたるか）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
1世	1	1	1	1
2世	23	13	13	13
3世	122	67	67	81
4世	29	16	16	97
分からない	3	2	2	98
不明，無記入	3	2	2	100
合計	181	100.0	100.0	

表4　回答者の出身地

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
リマ	174	96	96	96
沖縄	1	1	1	97
その他	3	2	2	98
不明，無記入	3	2	2	100
合計	181	100.0	100.0	

表5　回答者の学歴

	度数	パーセント
①小学校まで	11	6
②中学校まで	65	35
③専門学校まで	35	19
④大学まで	57	30
⑤その他	20	11
合計(延べ数)	188	

表6　回答者の通った学校

	度数	パーセント
①日系の学校	71	37
②中国系の学校	3	2
③カトリック系の学校	64	33
④ヨーロッパ系の学校	4	2
⑤公立学校	31	16
⑥その他	21	11
合計(延べ数)	194	

図1 職業

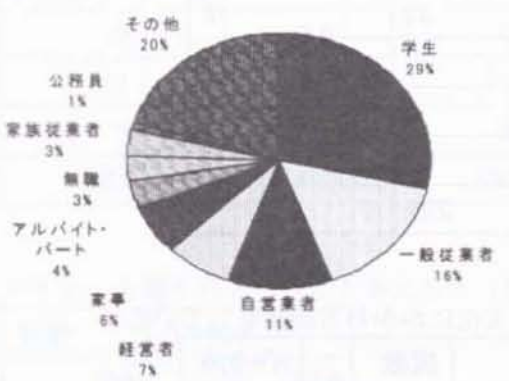


表7 沖縄方言（ウチナーグチ）を使えるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
まったく使えない	151	83	83	83
聞き取れる	22	12	12	96
話せる	4	2	2	98
不明，無記入	4	2	2	100
合計	181	100	100	

表8 日本語を使えるか

	度数	パーセント
①まったく使えない	61	19
②聞き取れる	96	30
③話せる	48	15
④読める	60	19
⑤書ける	58	18
合計(延べ数)	323	

表 9　家で使っている言葉

	度数	パーセント
①スペイン語	178	79
②日本語	33	15
③沖縄の方言	10	4
④英語	5	2
⑤その他	0	0
合計(延べ数)	226	

表 10　現在，どのような文化にかかわる活動をしているか

	度数	パーセント
①沖縄の歌・踊り等	44	21
②日本の歌・踊り等	16	8
③ペルーの歌・踊り等	35	17
④沖縄の空手	2	1
⑤日本の武道	4	2
⑥その他	24	11
⑦特になし	87	41
合計(延べ数)	212	

表 11 家で食べている料理

	度数	パーセント
①沖縄料理	46	15
②日本料理	66	22
③クリオーリョ料理	163	54
④その他	29	10
合計(延べ数)	304	

表 12　仏壇行事（トートーメー）に参加しているか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
はい	127	70	70	70
いいえ	53	29	29	99
不明，無記入	1	1	1	100
合計	181	100	100	

表 13　日曜日のキリスト教礼拝に出席しているか

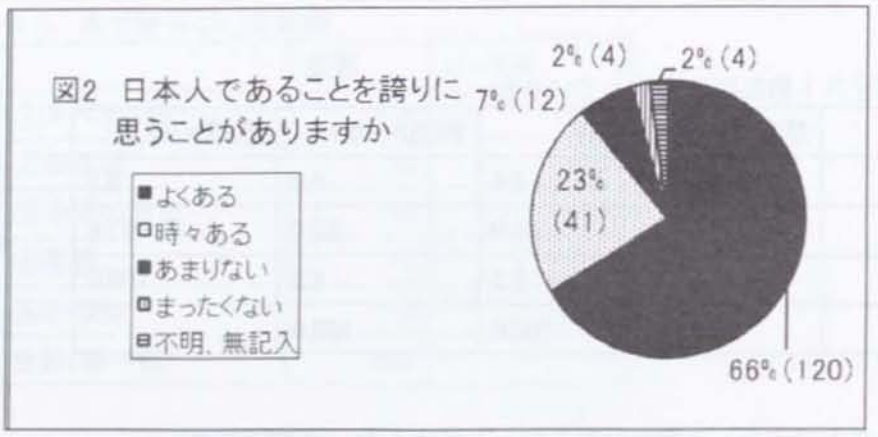
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
はい	16	8.8	8.8	8.8
いいえ	161	89.0	89.0	97.8
不明，無記入	4	2.2	2.2	100.0
合計	181	100.0	100.0	

表 14　「どこの国の人ですか」と聞かれたらなんと答えるか（複数回答可）

	度数	パーセント
①日系人	109	39.9
②日本人	9	3.3
③沖縄人	25	9.2
④ペルー人	130	47.6
⑤その他	0	0.0
合計（延べ数）	273	

表 15　沖縄と沖縄以外の日系人には慣習・しきたり・意識などに違いがあると思うか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
違いがあると思う	129	71	71	71
違いがないと思う	36	20	20	91
分からない	13	7	7	98
不明，無記入	3	2	2	100
合計	181	100.0	100.0	



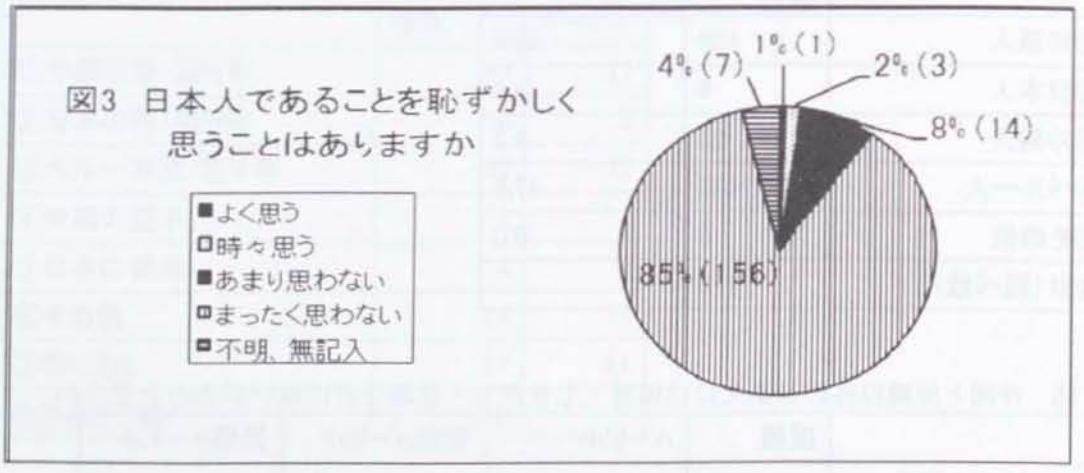


表 16　これまでに日本人だという理由でいやな目にあわされたことがあるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
ある	28	15	15	15
ない	149	82	82	98
不明，無記入	4	2	2	100
合計	181	100.0	100.0	

表 17　これまでに日本人でよかったと思ったことはあるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
ある	137	76	76	76
ない	39	22	22	97
不明，無記入	5	3	3	100
合計	181	100.0	100.0	

図4　自分の子どもがペルー人と遊ぶことへの抵抗感

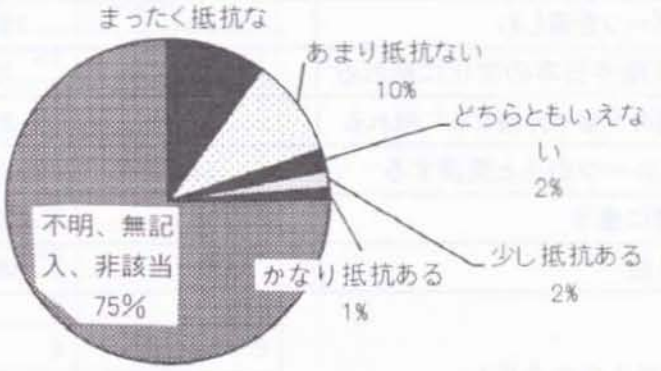


図5ー「沖縄に対して愛着を感じますか」

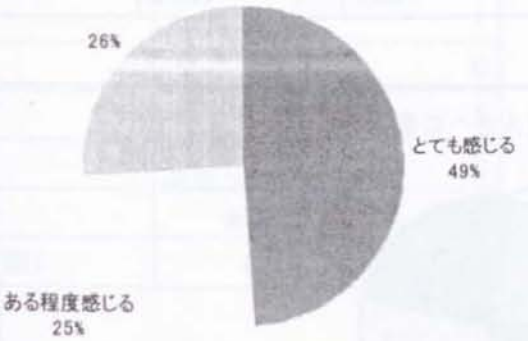


表 18　よく利用する施設

	度数	パーセント
①沖縄県人会	85	31
②ラ・ウニオン運動公園	84	31
③文化会館	98	36
④その他	8	3

表 19　それらの施設を利用する目的

	度数	パーセント
①スポーツを楽しむ	60	15%
②日本語や日本の文化に触れる	30	7%
③沖縄の方言や沖縄文化に触れる	37	9%
④同じルーツの人と交流する	51	13%
⑤友達に会う	106	26%
⑥その他	123	30%

表 20　県人会の会員か

	度数	パーセント	有効パーセント	
はい	97	53.6	53.6	
いいえ	80	44.2	44.2	
不明、無記入	4	2.2	2.2	
合計	181	100.0	100.0	

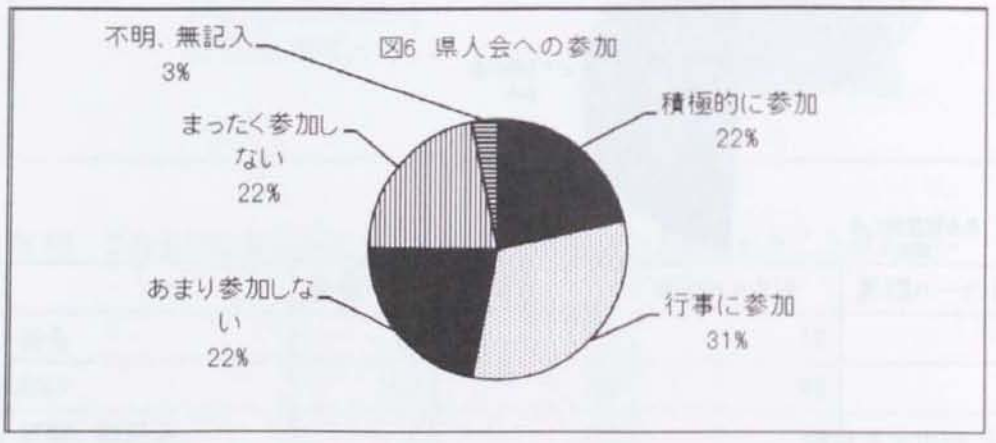


表 21　郷友会（村人会）に参加しているか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
はい	173	96	96	96
いいえ	1	1	1	96
不明、無記入	7	4	4	100
合計	181	100.0	100.0	

表 22　参加している郷友会

	度数	パーセント
①宜野座	24	13
②宜野湾	1	1
③具志川	9	5
④南風原	0	0
⑤糸満	10	6
⑥北中城	30	17
⑦名護	9	5
⑧那覇	5	3
⑨中城	11	6
⑩今帰仁	0	0
⑪沖縄市	28	15
⑫恩納	0	0
⑬大里	1	1
⑭豊見城	0	0
⑮浦添	1	1
⑯与那原	5	3
⑰その他	47	26
合計(延べ数)	181	

表 23　誰がペルーに移住したのか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
自身	1	1	1	1
父親	9	5	5	6
両親	3	2	2	7
祖父	42	23	23	30
祖母	14	8	8	38
祖父母	15	8	8	46
祖父と両親	3	2	2	48
曾祖父	1	1	1	49
不明，無記入	93	51	51	100
合計	181	100.0	100.0	

表 24　ペルーのどこへ移住してきたのか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
リマ	35	19	19	19
カヤオ	13	7	7	27
ラ・ビクトリア	6	3	3	30
バランコ	5	3	3	33
ウアラル	3	2	2	34
その他	14	8	8	42
不明，無記入	105	58	58	100
合計	181	100.0	100.0	

表 25　いつ移住してきたのか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
1910～1919	4	2	2	2
1920～1929	14	8	8	10
1930～1939	13	7	7	17
1940～1949	4	2	2	19
1950～1959	5	3	3	22
1960～1969	3	2	2	24
1980～1989	1	1	1	24
不明，無記入	137	76	76	100
合計	181	100	100	

表 26　リマ市内に親戚がいるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
いる	179	99	99	99
いない	1	1	1	99
不明，無記入	1	1	1	100
合計	181	100	100	

表 27　親戚とどのようなつきあいをしているか

	度数	パーセント
①家を行き来している	133	68
②もあいをする	17	9
③行事で集まる	29	15
④葬式・結婚式で会う	16	8
⑤つきあいがない	1	1
合計(述べ数)	196	

表 28　近所で誰と親しいつきあいがあるか

	度数	パーセント
①親戚	137	34.9
②沖縄系の人	95	24.2
③日系人(日本人)	73	18.6
④ペルーの人	88	22.4
合計(延べ数)	393	

表 29　子どもの頃，ペルー人と一緒に遊んだことがあるか

	度数	パーセント	有効パーセント	
あった	147	81	81	
なかった	33	18	18	
不明，無記入	1	1	1	
合計	181	100.0	100.0	

表 30　自分の子供はどの学校に通わせているか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
日本系の私立学校	9	5	5	5
中国系の私立学校	2	1	1	6
カトリック系の私立学校	20	11	11	17
公立学校	1	1	1	18
その他	10	6	6	23
不明，無記入，非該当	139	77	77	100
合計	181	100.0	100.0	

表 31 その学校に通わせた理由

	度数	パーセント
①教育方針がよい	11	39
②進学率が高い	4	14
③日本語を教えてくれる	3	11
④日本の習慣を教えてくれる	3	11
⑤日系人が多くて安心	4	14
⑥その他	3	11
合計(延べ数)	28	

表 32　沖縄に行ったことがあるか

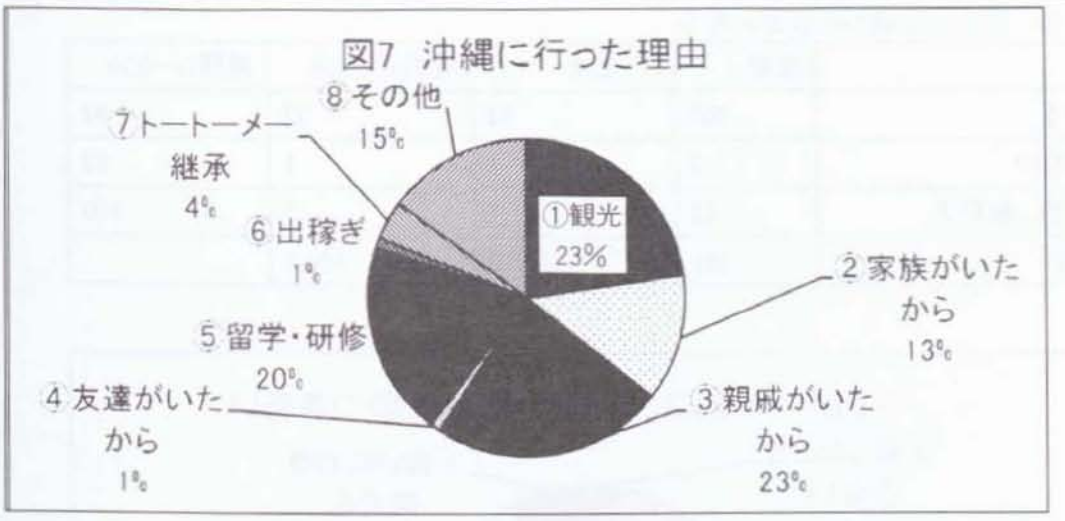
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
ある	55	30	30	30
ない	96	53	53	83
不明，無記入	30	17	17	100
合計	181	100.0	100.0	

表 33　沖縄での滞在期間

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
3ヶ月未満	38	21	21	21
3ヶ月以上 3 年未満	21	12	12	33
3 年以上	5	3	3	35
不明，無記入	117	65	65	100
合計	181	100	100	

表 34　日本（本土）に行ったことがあるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
ある	88	49	49	49
ない	58	32	32	81
不明，無記入	35	19	19	100
合計	181	100.0	100.0	



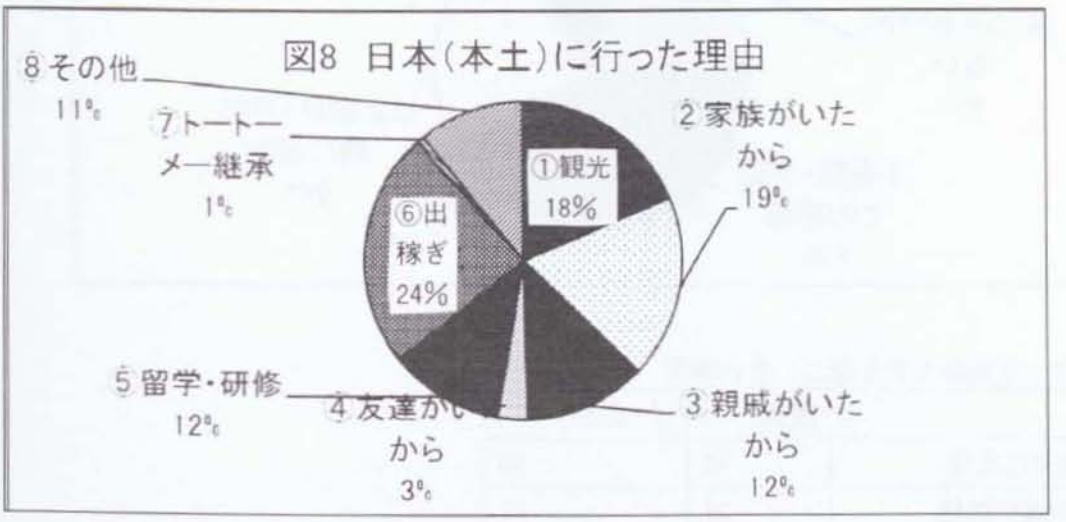


表 35　沖縄・日本に行った感想

	度数	パーセント
①文化・ルーツを意識するようになった	61	29
②日本人に親しみを感じた	30	14
③日本や沖縄の文化に親しみを感じた	44	21
④ペルー文化を意識するようになった	22	10
⑤ペルー人に親しみを感じるようになった	6	3
⑥意識，価値観に違いがあることを感じた	51	24
合計(延べ数)	214	

表 36　日本に家族か親戚がいるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
いる	167	92	92	92
いない	2	1	1	93
不明，無記入	12	7	7	100
合計	181	100.0	100.0	

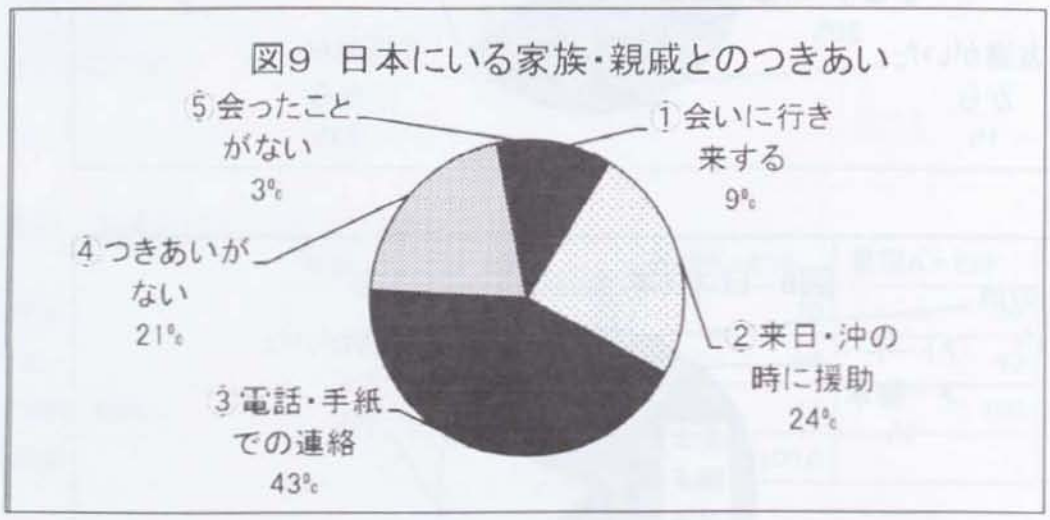


表 37　今後の人生を過ごしたい場所

	度数	パーセント
①リマに永住	93	50
②沖縄に移住	21	11
③日本本土に移住	5	3
④アメリカ本土に移住	10	5
⑤考えたことがない	39	21
⑥その他	18	10
合計(延べ数)	186	

表 38　世界のウチナーンチュ大会に参加したことがあるか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
ある	20	11	11	11
ない	139	77	77	88
不明，無記入	22	12	12	100
合計	181	100.0	100.0	